
IS（インフィニット・ストラトス）～空を愛する蒼剣～

天照大神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニット・ストラトス
IS→空を愛する蒼剣→

【Zコード】

Z0414R

【作者名】

天照大神

【あらすじ】

女性にのみ操縦とのできる兵器、
インフィニット・ストラトス
IS・・・・・

その常識は2人の「男」によつて覆され、2人の名は世界中に伝わ
つてしまつ・・・・・・

物語の行方はどうなるのか・・・・・・?

プロローグ（前書き）

どいつも、天照大神です！！

数人の他作者に影響されて・・・・・・

とうとうやってしましました！！

ISの一次創作です！！

私の3作品目になりますがどいつも宜しくお願ひします！！！

では・・・・どいつも！！

プロローグ

IIS、正式名称「インフィート・ストラトス」

世界中に存在するこかなる兵器よりも劣らない「究極の機動兵器」

ある一人の学者によつて発表され、そのすぐ後に起きた「ある事件」を境に急速に世界に広がつていつた・・・・・

IISを動かせるのは「女性」のみ、兵器として使われ始めたIISは世界各國の抑止力となりそれを維持するため「女尊男否」の社会が当然となりつつあった・・・・・

しかし、どんな事にもイレギュラーは生じるものである

それは如何にIISであらうと変わる事は無かつた・・・・・・

・

? side

? 「此処は何処だ・・・・・？」

俺は受験先の高校の試験会場を田指していたが会場内で迷子になつてゐた

? 「それもこれも・・・・・なんで「複数の高校の試験を一つの建物」で行うんだか・・・・・」

俺が今いる建物では、様々な高校の試験会場が設置されており、俺が受験しようとしていた高校もその中の1つだったからだ

? 「はあ・・・・・・・・

俺は建物の中をたださまよっていた

? ・ ? ? 「不幸だ・・・・・・ん?」

つきあたつを左に曲がると同年代の男子が俺と同じセリフを弦いていた

? ? 「・・・・・・・・

? 「・・・・・・・・

?・?・? 「同志よーーー！」

俺達は互いに握手してそんなセリフを言つていた

?・? 「俺も会場が分からなくてさ・・・・・・途方にくれていたんだよ」

? 「俺もだ、全く・・・・・なんで会場を纏めたんだか・・・・・

「

俺達は並んで建物の中を進んでいた

?・? 「俺は織斑一夏、お前は？」

? 「俺か？俺の名前は御剣蒼也、蒼也でいいぞ

一夏「分かった、俺も一夏でいいからな」

蒼也「ああ」

そして俺達の進んだ先には一つの扉があった

一夏「行き止まりか・・・・?」

蒼也「あの扉以外は、進む事は出来ないしな」

一夏「どうする、蒼也?」

蒼也「開けてみるか・・・・・何か手掛けりがあるかもしけない」

一 夏「手がかり?」

蒼也「この建物の地図とか……な

一 夏「なるほど……じゃあ、行くつぜ」

蒼也「ああ

俺と一夏は扉の前まで歩き、扉を開ける

蒼也・一夏「これは……?」

扉の先は真っ暗で天井の高い部屋の中心にロボットスースーらしきものが2機、天井からライトアップされていた

一 夏「なんだ・・・・・」れ？」

蒼也「・・・・・」S、だ

一 夏「I S・・・・・これが」

俺は向かって右の、一夏は左のI Sで自然と手を伸ばしていく

少し触れた瞬間にI Sの装甲が光り出す

？「君達！？此処でなに・・・・・をー？」

？？「そんな！？I Sが、動いているー？」

後の扉から2つの女性の声が聞こえる

? 「 」 うなつたら・・・・・君達、私達についてしてくれるかしら
? 「

? ? 「 事情はそこで聞きます。いいですね？」

蒼也・一夏「は、はい・・・・・・・・

俺達はそのまま、その2人について行つた・・・・・・・・・・

それから数ヶ月後

つまは4月、俺は一つの学園の前に立っていた

蒼也「此処が・・・・」[HS学園]」

俺は学園の敷地の広場に睡然としていた

蒼也「此処が俺が通う学校か・・・・進路が変わったけど、
楽しくやれるよな・・・・一夏もいるし・・・・」

蒼也 side out

プロローグ（後書き）

ちなみに蒼也のヒロインは2人程決まっております

一夏も2人は決まっているんです

1人をどうするかを悩んでいます・・・

では、次回をお楽しみに！！

主人公設定（前書き）

此処には蒼也の設定が書かれています

作品が進むたびに更新していくので新しく来られる方の中にはネタばれになるかと思います

そういうのはすいぶん先ですが（汗）

主人公設定

・御剣 蒼也（みつるぎ そつや）

15歳 男

世界で一夏以外にISを動かせる男。しかし、一夏同様ISの操縦は初心者並み

一夏とは受験日のあれで親友の関係である

かなり頭がよく、本来受験するはずだった高校も県トップクラスの高校だった

「瞬間記憶能力」持ちであり、スポーツ万能である。しかし、スポーツに関しては自身は人並みと言い張っている

IS設定

・フリーダム

一夏の白式同様、蒼也の為に作られた機体

見た目はまんまガンダムSEEDのフリーダムガンダム

- 初期設定時

背中にスラスターは付いているが翼の形では無い、武器は右手のビームライフルと左手のシールドだけである

武装

- ・ルプス・ビームライフル

- ・シールド

- ファースト・シフト
一次移行時

背中にフリーダムのスラスターが付き、腰にレール砲ヒューズのシールドエネルギーを消費して形にしinビームサーベルが2個使えるようになる

武装

- ・ラケルタ・ビームサーベル×2

- ・バラエーナ・プラズマ収束ビーム砲×2

- ・クスィフィアス・レール砲×2

- ・ルプス・ビームライフル

- ・シールド

第1話 HS学園（前書き）

どいつも天照大神です！！

原作小説を6巻全てまとめ買いしてきました！！

これで普通のペースで更新していくことが出来ると思います！！

では、第1話どいつも～～！

第1話 HIS学園

蒼也 side

蒼也（不味い…………）の空間は非常に不味い…………）

俺は入学時に貰った資料に書いてあった教室に付き、指定された通りの席に着席していた

しかし、HISはもともと女性にしか動かせない。そしてそれを学ばせるための学園である此処のクラスは必然的に

蒼也（俺と一夏以外全員女子…………心が休まらない…………）

せめて一夏の隣だつたら、とため息を吐く蒼也

一夏の席は一番前であり、俺は真ん中あたりである

周り8個の席全が女子…………正直辛い

? 「・・・・君、織斑一夏君！」

一夏「は、はい！！」

自席で考え込んでいた一夏を大声で呼んでいる女性、その声に反応する一夏

女性はこのクラスの「副担任」、山田真耶先生である

真耶「う、ごめんなさい大声だして。怒つてるよね？ そうだよね！？自己紹介を『あ』から始めて今、織斑君の『お』になったから読んだんだけど、自己紹介してくれるかな？ だ、駄目かな？」

山田先生はペーぺーこと頭を下げながら一夏にお願いしていた

その際にサイズがあつてなむけつた眼鏡が落ちそうになっていた

一夏「いや、そんなに謝らなくても……ちやんと血口紹介しますから、先生落ち着いて下さい」

真耶「ほ、本当…? 本当ですか…? 本当ですね…? や、約束ですよ! ? 絶対ですよ…?」

山田先生は一夏の手をとつて熱心に詰め寄っていた

蒼也（一夏のも大変だな）

一夏は先生が手を離すと、立つて後ろに振り向く

一夏「えー・・・えっと、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

一夏は儀礼的に頭を下げて、上げた。そしてそれだけ言つて席に座つてしまつた

蒼也（おーおい！？なんだよこの空気ー？女子の方から『もつといろいろ喋ってよ』とか『もう終わりなの！？』って視線が一夏に向かってるやー…）

そんな感じで田口紹介は続いて行く

真耶「じゃ、じゃあ次は御剣君ですね！お願いします！！」

山田先生に言われ、今度は俺が立つ

蒼也「えっと……御剣蒼也です。その……そんな特徴ないですか、よろしくお願ひします」

俺はそりゃ聞いて座りこまつ

蒼也（つか他に何を言えとー…？）

俺は一夏の時と同様の女子の視線をきにしつつ思つていた

そして全員の自己紹介が終わると同時に、前の扉から教室に1人の女性が入つてくる

蒼也（誰だ・・・・？もしかして、このクラスの担任？）

一夏「ち、千冬姉？」

- パアンッ！ -

一夏が言つと同時に女性は持つていた出席簿で一夏の頭を叩いた

一夏はそれを喰らい机に沈む

? 「学校では「織斑先生」だ、馬鹿者め」

その女性は教卓の前まで歩いていき、教室にいる生徒を見渡す

? 「諸君、私が織斑千冬だ。新人の君たちを1年で使い物の操縦者になるように育てるのが仕事だ。私の言つ事はよく聞き、よく理解するよつて。出来ない者には出来るまで指導してやる」

織斑先生が言いきつてから数秒間、教室内は鎮まる

しかし、

「キヤ-----千冬様、本物の千冬様よ-----」

「ずっとファンでした!!--」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです!!--北九州から!!--」

「わ、私は北海道の端つこからです!!--」

いや、北九州も北海道の端つこも変わらないだろ。と俺は内心で思つ

「あの千冬様に」指導させていただけるなんて嬉しいです！！」

「私、お姉さまのためなら例え火の中水の中！－何処までもお伴します！－」

「甘いわよー！私はお姉さまのためなら死んだつて構わないわー！」

おい、後ろの2人はいくらなんでもおかしいだろ・・・

一夏「いてて・・・・・」

と、そこで出席簿によつてダウンしていた一夏が復活する

一 夏「つてなんで!」んな騒いでるんだ? 千冬姉

パンツ!!

千冬「織斑先生だ」

一夏「は、はい・・・・・織斑先生」

千冬「全く・・・・・織斑といい、このクラスの女子といい・・・・・なんで私が受け持つクラスに馬鹿が集約するんだ?」

真耶「さ、まあ・・・・・?」

とまあ、一夏と織斑先生のやり取りを聞いていた数人の女子からある言葉が発せられる

「え・・・・・? 織斑君って、あの千冬様の弟・・・・?」

「いいなあ・・・・・変わつて欲しいなあ・・・・・」

千冬「さて、さっそく授業を始める――教科書を出せ――」

織斑先生の一言で教室が静まり、授業が始まった

！…（

俺は心の中で一夏の名前を呟んでいた・・・・・・

蒼也・一夏「はあ・・・・・・」

2時間田終つ後の休み時間、やつと一夏と話す事が出来たがお互いにため息を吐いていた

? 「うひとよひじへて?」

一 夏「へ?」

蒼也「ん?」

話しかけてきたのは金髪が鮮やかな女子だった

? 「わたくしに話しかけられてそんな態度・・・・もつと相応の態度といつもの出来ないんですか?」

やつられ、俺と一夏は互いに同じ事を思つ

蒼也・一夏（苦手だ・・・・）（うつむきの奴は・・・・）

? 「わたくしはイギリス代表候補生、セシリ亞・オルコットですわ

「…」

一 夏 「代表候補生ってなんだ？」

一 夏の言葉にかたまるセシリ亞

セシリ亞 「あ、あなた本気で言っていますのーー？」

蒼也 「ああ・・・・・一夏、参考書捨ててたんだっけ・・・・・ 読んでないなら仕方ないな」

一 夏 「ああ・・・・・って訳だ。『めんな』

セシリ亞 「ま、まあいいですわーー！ISの操縦の仕方が分からなかつたら是非！どうしてもつて言つのでしたらわたくしが直々に教えて差し上げますわーー！入試の際に唯一教官を倒したこの私がーー！」

蒼也・一夏「教官？俺たちも倒したぞ」

今度は2人の言葉に教室の時間が止まった

セシリア「そ、そんな！？わ、わたくしだけと聞きましたが！？」

一夏「女子ではつてオチじゃないのか？」

蒼也「はつきり倒したとは俺達だと言えないけどな・・・」

セシリア「そ、そんな・・・・わたくしだけでは無い」とー?そんな事が・・・・」

セシリアは2人の言葉に慌て始める

蒼也「オ、オルコットさん。とつあえず落ち着いて」

セシリ亞「これが落ち着いていられ……………」

・キーンゴーンカーンゴーン

蒼也「あ、本鈴だ」

セシリ亞「くつ……また後で来ますわ……逃げない事ね……」

セシリ亞はそいつて皿席に座った

千冬「それでは、授業を始める。この時間ではっと、その前に決めておくことがあつたな」

織斑先生がふと思ひ出したよつに話を変え始めた

なんだ？

千冬「再来週行われるクラス対抗戦にでる代表を1人決めなければ
な」

一夏「対抗戦・・・？」

千冬「そうだ、クラスの代表であり対抗戦だけではなく生徒会が開
く会議や委員会への出席・・・まあ、対抗戦以外は普通の学校
と変わらん」

「はいはい！ 織斑君を推薦します！ ！」

一夏「は！？」

「私もそれがいいと思います！ ！」

一夏「お、俺！？」

千冬「では、候補者は織斑一夏。他にいないか？自薦他薦は問わな
いぞ」

「じゃあ、御剣君を推薦します！――！」

「私も私も――！」

蒼也「俺もか・・・・・・・・

千冬「では、多数決で決めよつ。まずは・・・・・・・・」

セシリア「待つて！――！納得がいきませんわ――！」

セシリアが立ちあがつて俺と一夏を見る

セシリ亞「男がクラス代表なんて・・・・・代表候補生のわたくしに1年間そんな屈辱を味わえとー?」

織斑先生を始め、クラスの全員がセシリ亞の発言に耳をかたむけて
いる

セシリ亞「実力が1番の方が代表になるのは当然の事!! こんな島国で、文化的にも後進している国の男になんて任せられるはずが -
- - -
- - - -
- - - - -

一夏「じゃあ、戦つか?」

セシリ亞「ー?」

一夏が立ちあがつてセシリ亞を見ていた

それに合わせて俺も立ちあがる

一夏「EHSの試合で勝つた方がクラス代表。それでいいか?」

蒼也「俺は一夏の意見に賛成だ。どうする、オルコットさん?」

セシリア「いいですわ!ただし、わざと負けるよつた事をしましてわたくしの奴隸になつてもらいますわよ。」

蒼也「上等だ。……そつだ一夏、あればどうする?」

一夏「そつだな。……ハンティはどうする?」

セシリア「さつそくお願いですか?」

蒼也「いいや。……」「俺達がどの位つかるのか」って事だ

セシリ亞「つ・・・・いい度胸ですわ、そしてハンデ? 笑わせてく
れますわね! ?」

千冬「軽々しく大口をたたくな、馬鹿どもめ」

蒼也・一夏「いてつ! ?」

出席簿でたたかれ、頭を押さえる俺と一夏

千冬「では、勝負は一週間後の月曜。放課後、第3アリーナで行う。
織斑、御剣、オルコットはそれぞれ準備しておくよ! 」
では、授業を始める! ! !

そして、クラス全員は授業に集中し始めた

第2話 クラス代表決定戦！！（前書き）

どうも天照大神です

更新が遅れてしまませんでした

では、第2話をどうぞ！！

第2話 クラス代表決定戦！！

蒼也・s.i.d.e

（放課後）

一夏「はあ・・・・・・・・」

蒼也「おい、大丈夫か一夏？」

一夏「あ、ああ・・・・・」

俺と一夏は放課後の教室にのこっていたが一夏はぐつたりとうなだれていた

一夏「専門用語が多すぎる・・・・・ついていけん」

蒼也「悪く言えばお前の血業自得だけどな・・・・・・」

一夏「うぐつ・・・・・・」

反論できない一夏は頭を机に突つ伏せる

蒼也「此処にいても疲れはとれないな・・・・・・」

俺達が今日の感想をいうなら「地獄」だった

クラスには他学年・他クラスから女子が押し掛け小声で話し、昼休みに昼食を食べに学食へ移動すると全員が大行列のようについてくる

そんな初日だったのだ

真耶「ああ、御剣君に織斑君。まだ教室にいたんですね、良かつたです」

一 夏「はい？」

一 夏と俺は呼ばれた方向をみると山田先生が書類を片手に持つて立っていた

真耶「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

蒼也「部屋ですか？確かに週間程は自宅からの登校と聞いていたんですけど」

一 夏「俺もそう聞いていたんですけど」

真耶「そのですね・・・事情が事情なので部屋割りを無理やり変更したんですよ」

そーなのかーと俺と一夏は心の中でうなづく

真耶「政府特命という事もあつたので寮に入れるのを最優先したみたいなんです」

一夏「でも・・・荷物が無いんで一度家に帰りますよ?」

千冬「その必要は無い、私が手配しておいた

俺と一夏は声がした方向を向いた

そこには織斑先生が立っていた

千冬「生活必需品と・・・携帯電話の充電器があればいいだろ
「つづけ」

一夏「どうでもあります・・・

蒼也「すみません、ありがとうございます」

真耶「じゃあ、時間を見て部屋に行つてくださいね。夕食は6時から7時、寮の1年生用食堂で取つてください。各部屋にシャワーがあつて大浴場も他の場所にあるんですが・・・2人は今は使えません」

一夏「え?何ですか?」

一夏、その質問は可笑しいぞ

千冬「アホかお前は。 同年代の女子と一緒に入りたいのか?」

一夏「あー・・・すみません、そうでした」

千冬「私達はこれから会議なのでな、山田先生」

真耶「はい、これがお二人のルームキーです。道草しないで寮に帰つてくださいね」

そういって俺と一夏にルームキーを渡し、2人は教室から出ていった

一夏「俺は1025室だな」

蒼也「俺は隣だろうな、1026室だ」

俺達は帰りの準備を終え、席を立つて教室から退散した

蒼也「じゃあな一夏、また後で」

一夏「おひ

俺と一夏は寮の部屋まで来て、お互いの部屋の前で別れた

蒼也「へー、綺麗だな

目に入ったのは大きめなベット一つだった

俺は直ぐにベッドに腰掛ける

その時だった

ズドン！！

蒼也「なんだ！？」

外からそんな音が聞こえ、ドアを開けて周りを見る

すると横の部屋のドアに一夏が背中合わせにしゃがんでいた

蒼也「一夏？どうしたんだ！？」

すると他の部屋から女子生徒がぞろぞろと出てきた

一夏「蒼也！－訳は後で話す！－ 篠、篠さん。頼みますから部屋に入れてください。というか謝りますので。頼みます！－」

そして数秒後

第「・・・・・入れ」

ドアを開けた簾を見て一夏は部屋に入つていった
さて

蒼也「俺も部屋に・・・・・」

「えー? 御剣君の部屋はそこなの! ?」

「ほんとーー? ねえねえ、はいってもいいかな! ?」

「わたしもわたしもーー! !

蒼也（頼む、お願ひだから服をしつかりときてくれよ・・・・・）

女子生徒達の恰好はラフなルームウェアばつかだつたのを見た蒼也
はとても氣まずかったようだった

そして時は進み代表決定戦の日

一 夏 「・・・・・」

蒼也 「・・・・・」

篇 「・・・・・」

俺達は第3アリーナのAピットで待機していたんだが…………

蒼也「篠ノ之さん、おれは一夏にEVAの事を教えるつて聞いてたんだが…………」

竜「うう…………」

蒼也「一週間剣道だけって一夏、負けるやがれ」

竜「し、仕方ないだろう…………こいつは自分のEVAがなかつたのだから――！」

そう言わると俺も何も言えない

真耶「あ、織斑君織斑君織斑君！――」

蒼也「山田先生、どうしたですか？」

真耶「あ、御剣君もいたんですか。お二人の専用ISが届いたんですよー！」

千冬「織斑、すぐに準備しな。まずはお前からオルコットと対戦してもいい」

一夏「え？ はい？」

「IJの程度の障害、男子たるもの乗り越えてみせる。一夏

一夏「お、おうーーー」

一夏はそつまつヒーリングの搬入口の前に立つ

搬入口が開き、中のものが見えた。そこには

『白』が存在していた

一夏がHS、「白式」を身に纏つてオルコットさんと戦い始めた
その間に俺も自分のHSの準備を山田先生と一緒に始めていた

真耶「御剣君のHSは織斑君の白式よりもフォーマットとファイット
イングに時間がかかるそつなんです。だから織斑君に先に戦つても
らってるんです」

搬入口に別のコンテナが届き、箱が開いていく

そこには déjà か俺を待っていたかのように待機している機体があった

真耶「御剣君の専用 IIS、『フリーダム』ですーさ、早く準備しますよー！」

蒼也「はいー！」

しかし、俺が始めた瞬間

『試合終了。勝者 セシリア・オルコシト』

試合開始からおよそ30分、一夏の敗北がピット内に聞こえた

第「一夏・・・・・」

蒼也「あの馬鹿者め・・・・・・武器の特性を理解しないからだ」

蒼也（一夏・・・・・・）

そして、ピタリ一夏が帰つてきた

一夏「なんで俺は負けたんだ？」

千冬「武器の特性に気づかないからだ、馬鹿者め」

一夏「うう・・・・・」

千冬「山田先生、そちらは終わりそうか？」

真耶「だ、駄目です。オルコットさんの整備が終わってもまだかかります」

千冬「そつか、御剣。お前も試合中にエスに慣れる。いいな？」

蒼也「はい・・・・・」

そしてオルコットさんの準備が終わり、俺も現段階の調整でエスに乗る

一夏「がんばれよ蒼也」

蒼也「ああ」

そして、俺はアリーナ内に向かっていった

蒼也（これがＩＳの戦闘・・・・さつきの試合、忙しくてみてね

警告！敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初段エネルギー装填

セシリア「先程の方のように・・・・このわたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で踊りなさい！！」
蒼也「まあな、それに逃げたら男の恥だしな」

セシリア「あら？あなたも逃げませんでしたのね」

えから武器が全く分からん）

そう思つてゐる間にセシリアの「スター・ライトマーク？」から閃光が放たれ俺を撃ち抜く

蒼也「うわー？」

俺は何とか避けるが肩にかすつてしまつ

セシリア「避けた？この私の攻撃を？」

蒼也「いやいや、かすつたぞ」

セシリア「そんなもの当たつたうちに入りませんわー……この……」

そして、先程と同じ攻撃を連射するセシリア

蒼也「ちよーーうわっーー？」

どれも直撃はしないがエのシールドエネルギーはどんどん減っている

シールドエネルギー残量、503

蒼也「俺も攻撃しないとな」

そういうて俺は右手のルプス・ビームライフルでオルコットさんに向かって撃つ

セシリ亞「当たりませんわーー！」

しかし、簡単に避けられ俺は再び閃光の嵐に襲われる

セシリ亞「行きなさい、ブルー・ティアーズー！」

セシリ亞の言葉と同時に、俺の目の前にセシリ亞の横を浮遊していたピットが2機現れる

そして、その砲身から閃光が放たれ俺に直撃する

蒼也「つー！」

バリアー貫通、ダメージ98。シールドエネルギー残量405

そして、その衝撃で動きが鈍っていた俺を狙つて

セシリ亞「終わりですわ
」

さらに追加された2機のピットとスター・ライト、計7つの砲身から

の閃光が俺に放たれた

蒼也・ side out

千冬「よく見る織斑、まだ御剣は負けてはいないぞ」

一夏「蒼也！！」

一夏 side

一夏「え・・・・?」

俺が画面を見ると胸中に先ほどまで無かつた翼のよつたスラスター
が付き、両側の腰にはレール砲を思わせるよつた武器がついていた

一夏 side out

セシリア「あ、あなたも初期設定だけで私と戦っていたんですねー!」

蒼也 side

？」

蒼也（ああ、そつか・・・・・）の感じ。これで、「フリーダム」は俺の専用機体になつたんだな）

俺は変化した装甲や武器を確認する

蒼也（ラケルタ・ビームサーベル・・・・・）れか？）

俺はビームライフルを閉まつて腰にセットされていた細長い棒を手にす

あると、手にしたところのさきの穴から蒼い光の剣が現れた

シールドエネルギー減少、残量150

蒼也（つまり、これはシールドエネルギーを媒介に形になる武器つてわけか）

残っていたエネルギーがラケルタを出して減ったことで特性を理解する蒼也

セシリ亞「ぐつ・・・・・喰らいなセーー！」

7つの砲身から再び閃光が放たれる

しかし

蒼也「ふつ・・・・・」

少し動いただけで全ての閃光をよける蒼也

セシリ亞「なつ・・・・・！？」

蒼也「はあ！！！」

両腰のクスイフイアス・レール砲でそれぞれピットを破壊する蒼也

セシリ亞「そんな！？でも、まだわたくしが有利ですわー！」

残ったピットでタイミングをずらしながら蒼也に撃つセシリア

蒼也「それは・・・・・もう見切つた!!」

蒼也はタイミングがバラバラな放射にも関わらず全て避けたりビームサーベルで斬り落とし、セシリ亞に接近する

セシリア「そんな！？」

右手のビームサーベルでセシリ亞を一閃する

それと同時にビームサーベルの光も消失する

蒼也（他になんか……これは？）

蒼也はフリーダムの武装を確認しているとある一つの項目を発見した

蒼也（ちゅうどいい、これで終わらせる……）

蒼也はセシリ亞から離れ、全ての砲身を構える

ただの棒になつたビームサーベルを戻し、ビームライフルを右手に
持ち

両腰のレール砲を構え

背中のウイングスラスターに隠れていた2機のバラエーナ・プラズマ収束ビーム砲を開幕する

マルチロックオンシステム発動。ハイマットフルバースト、発射可能

画面が現れ、4機のピットとセシリアにロックオンカーソルがあたられる

セシリア「くつ・・・・ダメージがまだ」

蒼也「これで終わりだ、オルコットさん」

セシリア「え・・・・・？」

蒼也の声でよつやく自分がロックオンされている事に気がついたセシリア

蒼也「ハイマットフルバースト・・・・・発射ああああああああああああああ！」

そして、構えられていた5つの砲身から閃光が放たれ

4機のピットとセシリ亞を撃ち抜いた

『試合終了。勝者
御剣蒼也』

蒼也「勝つた・・・・・」

蒼也が一息つくがセシリアがアリーナの地面に落下し始めたのを見た

「あふなー!?」

直ぐにセシリ亞を抱きかかえ、Aピットに戻る蒼也

セシリ亞「…………ん」

蒼也「大丈夫か、オルコットさん？」

セシリ亞「わたくし…………負けましたのね」

蒼也「とにかく、身体に異常が無いか先生に診てもらおうか？」

セシリ亞「は、はい…………」

こうして、結果としては男組1勝、セシリ亞1勝となつた

セシリア side

セシリアはあの後、保健室で診察を終え更衣室に戻った

今は更衣室のシャワーを浴びてこられる所だ

セシリア（今日の試合）

まづ思い出していたのは一夏との試合

勝つたはずなのにセシリ亞は困惑し、落ち着いていられなかつた

セシリ亞（織斑……一夏）

そして、自分を負かした蒼也の事を思い出す

セシリ亞（御剣……蒼也、わたくしに……かつた男）

一夏も蒼也にもセシリ亞は共通のものを見つけていた

セシリ亞（あのような瞳……強い意志を持つた瞳。他者に媚びる事のない眼差し）

そして、自分を抱える蒼也の顔を思い出すと胸が熱くなるのをセシリ亞は感じていた

セシリ亞「織斑一夏……」

一夏の名前を呴くが特に変化は無い

セシリア「御剣、蒼也・・・・・」

次に蒼也の名前を呴くとまた胸が熱くなるのを感じた

セシリア（・・・・・・・・）

彼の事をもつと知りたい・・・・・

知りたい、蒼也の事を・・・・・

セシリアは自身の唇にそつとてで触れる

その唇は触れられる事を望んでいたかのように不思議な興奮をセシリアに与えていた

そして、彼女がいる浴室には水の流れる音がただただ響いていた・・・

セシリ亞 side out

第2話 クラス代表決定戦！！（後書き）

セシリア陥落

そして次回は鈴の登場

皆さん、お楽しみに！！

第3話 転校生はシンボレッジホール？（前書き）

第3話 転校生はシンリレツインテール？

一夏 side

クラス代表決定戦の翌日、朝のＳＨＲショートホームルームで俺は起きるはずがないと思つていた事が起きた

真耶「では、一年一組の代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繫がりで感じが良いですね！」

クラス内に女子の声が盛り上がり聞こえる

暗い顔をしているのは俺だけだった、俺だけだった・・・・

一夏「先生、質問です」

真耶「はい、なんでしょうか織斑君」

俺は拳手して山田先生に疑問をぶつけた

一夏「なぜ俺が代表なんですか？俺は負けましたし、ここは蒼也かセシリ亞が妥当では……」

真耶「それは」「

蒼也・セシリ亞「わたくし俺が辞退したからだ（ですわ）」

セシリ亞が立ちあがつて腰に手を当てるポーズをとりながら言い、蒼也が拳手して言う

タイミングほぼ一緒だったな……・気が合ってそうだな、2人とも

セシリ亞「素人同然のあなたが戦つたのはわたくしセシリ亞・オルコットだったのですから。負けるのは仕方ないかと。考えれば当然の事ですわ」

「うぐう……事実だから反論んできません

セシリ亞「それに……わたくしも大人げなく起こつた事を反省しまして」

うん、それで？

セシリ亞「『一夏さん』か『蒼也さん』にクラス代表を譲るつと決めました。しかし、蒼也さんは辞退するとおっしゃつたので一夏さんに決まつた訳ですわ」

そうか、つかこいつの間に俺を名前で呼ぶよつに……って

一夏「おい蒼也……お前は勝つたんだからお前が代表になれば良いだろー！」

俺は立ちあがつて席に座っている蒼也の方を向く

蒼也「いや、俺はそこまで田立ちたくないから。それに、俺は代表なんてやつてられん」

一夏「けどよーーー！」

俺はさうに反論しようとしたが

「いやあ、セシリア分かってるねー」

「うんうん。せっかく男子がいるんだから、同じクラスになつた以上持ち上げないとねー」

「私は御剣君が良かつたんだけどなあ・・・」

セシリ亞「当面はわたくしのよつに優秀かつエレガント、華麗にしてパーカクトな人間がお一人にTTS操縦を教えて差し上げれば、素晴らしい成長を遂げ

第「あいにくだが、一夏の教官は足りてない。『私が、直接頼まれたのだからな』

第が机をパンと叩いて立ちあがつて言った

セシリア「そうですか？でも、CランクのあなたがわたくしAランクのように」教導出来るのかしら？」

第「ラ、ランクは関係ないだろ？！」

あー、うん。とにかくだ・・・・・・

誰でもいいから俺にHSの操縦を教導してくれ・・・・・・

蒼也

s.i.d.e

蒼也（おーおー、篠ノ花さんもオルコットさんも張り合ってんやー）

俺は2人の張り合いを聞きながら教科書を読んでいた

蒼也（一夏、お前に譲ったのはそういうのは俺には似合わないから
だよ・・・・・俺は、主人公キャラなんか似合わないから・・・・
・）

一夏は机に沈んでいて、2人はまだ言い争っている

蒼也（ま、頑張れよ。一夏）

あ、3人とも織斑先生の出席簿に叩かれた

3人は千冬の相棒によつて鎮圧されていた

日は進み、四月の下旬

俺のクラスは織斑先生によるE.Sの基本的な飛行操縦の授業を受けていた

千冬「織斑、御剣、オルコット。試しにお前らが飛んでみせり」

一夏は右手のガントレット、セシリアは左耳のイヤーカフス、俺は右手の剣のブレスレットに手をかけた

3人がE.Sの展開を終え、千冬が声をかける

千冬「よし、飛べ」

3人は一斉に飛び上がった

上昇速度はセシリア、蒼也、一夏の順だった

千冬「何をしてこる織斑、スペック上では白式の方が出力が上だぞ」

一夏は早速お叱りを受けていた

セシリ亞「くすっ、一夏さん。イメージは所詮イメージ。自分に合った方法を模索する方が建設的ですわよ」

一夏「そう言われてもなあ・・・・なんでセシリ亞や蒼やは普通にいられるんだよ。俺は全然慣れねえよ」

蒼也「俺だってまだ慣れてないし、セシリ亞のよひよひ飛べないんだからな」

この数週間の間に俺はセシリ亞をこれまで飛び回りになっていた

とこうよりセシリ亞がそうしてくれと言つてきただが

そして、千冬から通信が来る

千冬「御剣、織斑、オルコット。急降下と完全停止をせつて見せろ。
目標は地表から10㍍だ」

セシリ亞「では蒼也さん、一夏さん。お先に」

セシリ亞がそつと地上に向かい、止まる

見事成功したようだ

蒼也「じゃ、次は俺が行くか。じゃあな一夏」

一夏「おう

俺は一夏に向つて地面に向かう

蒼也（やつぱまだ慣れないな・・・）

そして、衝突ギリギリの所で機体を止めた

千冬「御剣、もう少ししゃかりやれ。3cmオーバーだ」

御剣「はい・・・・・・」

そして最後に一夏が向かって来る

ギュンッ

！！！

ズドオオンッ

蒼也（あーあ・・・・・グラウンドに一夏作クレーターの出来上がり・
・・・）

千冬「馬鹿者。グラウンドに穴を開けてどうする」

一夏「すみません・・・・・・」

第「情けないぞ一夏。昨日私が教えてやつただれり」

姿勢を直した一夏を第が待っていた

第「大体貴様は

」

セシリ亞「まあまあ篠ノ之せん。お説教は後にして下さらない?」

第「何?」

そしてまたセシリ亞と第のぶつかり合いが始まり、2人は千冬の出席簿アタックを喰らうのであった

次の日、一夏と俺はそろって登校していた

そして、クラスに入ると同時に女子から話しかけられる

「織斑君、御剣君。おはよー」

「2人とも聞いた? 2組に転校生が来るって噂! ! !」

蒼也「そつなのか?」

「うん、なんでも中国の代表候補生なんだって」

蒼也「ほー」

あ、代表候補生と言えば

セシリ亞「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入か
しら？」

我がクラスの代表候補生、セシリ亞が腰に手を当てたポーズで言つ

篠「ふん、このクラスに転入するわけではないのだろう？　いちいち
騒ぐ必要はない」

自席に座っていた篠がいつの間にか一夏の隣に来ていた

セシリ亞「一夏さん！！他クラスに負けない為にも今日の放課後からより実践的な訓練をしましょう！！わたくしが相手をいたしますわ！！専用機持ちはわたくし達3人だけなのですから！！」

？「残念だけど、その情報は古いよ

声が聞こえ、そちらを向くと教室の入り口にツインテールの女の子が此方を見て立っていた

蒼也「誰だ？」

? 「一組も専用機持ちがクラス代表になつたの。悪いけど、簡単には優勝出来ないから」

ツインテールの女の子がそう言ってから一夏が口を開いた

一夏「鈴・・・？お前、鈴か？」

鈴「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。ファン・リンイン音。今日はあんた達に宣戦布告に来たつて訳」

そう言つと同時にツインテールが軽く揺れる

一夏「なに恰好付けてるんだ?似合わねえぞ」

鈴「んなつ・・・・!?なんて事なのよ、あんた

「

千冬「おー」

鈴「何よー?」

あ、あの子やつがいた

バシンッ!!

鈴の頭に出席簿が叩き込まれた

我がクラスの担任、織斑先生の登場である

千冬「もう少しひの時間だ。教室に戻れ」

鈴「ち、千冬さん……」

千冬「織斑先生と呼べ。そしてさつさと戻れ、そして入り口を塞ぐ
な。邪魔だ」

鈴「す、すみません……」

千冬に譲るよつアからざく鈴

鈴「後でまた来るからねーー逃げないでよー夏ーー!」

若干涙田で自分のクラスに戻つていった鈴であった

蒼也「なあ一夏……」

一夏「ん?なんだ?」

蒼也「彼女つて……シンデレカ?」

一夏「…………分からん」

そして、チャイムが鳴りSHRが始まった

第3話 転校生はシンデレツインテール？（後書き）

天照大神「どうも天照大神です」

蒼也「御剣蒼也だ」

天照大神「君は何と言つか……一夏に出番譲る気なの？」

蒼也「俺には主人公のよつな出番は似合わん」

天照大神「そつか……あ、タイトルですが鈴はシンデレだ
と思う方は拳手お願いしますwww

蒼也「ではでは」

鈴「あたしはシンデレじゃないわよ…………！」

一夏「どうした鈴？いきなり叫んで」

鈴「な、何でもないわよーーー！」

でせでは

第4話 決戦！！ クラス対抗戦（リーグマッチ）

蒼也 side

授業は始まり各自がノートをとるなど誰もが普通の行動をしていた
だけど

千冬「篠ノ介、答えは？」

篠「は、はい！？」

何故か一夏を見ていた篠を咎めし、回答を求める織斑先生

千冬「答えは？」

篠「・・・・・や、聞いてませんでした・・・」

ばしーん！

篠の頭に織斑先生の出席簿が振るわれた

普通篠はこんな事しないはずなんだが・・・・?

そしてそれは篠だけでは無かつた

千冬「オルコット」

セシリア「・・・例えれば『テート』に誘うとか。いえ、もっと効率的な・
・・・」

千冬「・・・・・」

ばしーん!!

教室内にまた、同じ音が響いた

織斑先生は呆れた表情で頭を叩いていた・・・・・・

筈・セシリ亞「一夏（蒼也さん）のせいだ（ですわ）！！」

蒼也・一夏「はあー？」

午前中の授業が終わり、昼休みになつて4人で集まつた瞬間、開口一番で俺達は文句を言られた

午前中、2人は山田先生に注意5回、織斑先生に3回も叩かれていた
正直自業自得なのがなんで俺と一夏のせいになるんだ？

一夏「と、とにかく飯食おうぜ」

蒼也「そうだな、話は食いながら聞くからさ」

篇「む・・・ま、まあお前がそつぱいのなら、いいだらう」

セシリ亞「や、やうですわね。言つて差し上げない事もになくって
よ」

2人の言葉に適当に答へつつ俺達は移動した

鈴「待つてたわよ、一夏ーー！」

鈴音さんが食券機の前で立ち塞がっていた

一夏「鈴、とりあえずそこをどこでくれ。食券出せないし、通行の邪魔になってるぞ」

鈴「う、うるさいわね。分かってるわよ」

普通に会話してるな、2人とも仲良しだな

その後、鈴音さんを加えて5人でテーブルに座った

鈴「そういうえば一夏、あんたなに工事使ってるのよ。ニュースで見た時ビックリしたじゃない」

先程から一夏と鈴音さんの間で会話が続いていた

第「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

セシリア「そうですねー！一夏さん、まれかじりの方とお会いして
らっしゃるのー。」

ん？ そうなのかな？

俺も聞きたくて一夏と鈴音さんの方を向いた

鈴「べ、べべ、別に私は付き合つてゐるわけじゃ……」

一夏「そうだぞ。俺達はただの幼馴染だよ、つかなんでそんな話になるんだ？」

鈴「つ・・・・・・・・」

そう言つた一夏を怒りがこもつた目で見る鈴音さん

ああ、そう言つ事か

一 夏「？なに睨んでるんだ、鈴？」

鈴「何でもないわよーーー。」

一 夏の言葉に怒る鈴音さん

笄「・・・・幼馴染？」

一 夏「ああ、笄が転校すると入れ替わりで鈴が転校してきたんだ。中一の終わりに国に帰ったから、余りのは一年ぶりとぶりなんだ」

鈴「そ、そういうえばそつだつたわね」

一 夏「まあ、簡単に言えば笄が「ファースト幼馴染」、鈴が「セカンド幼馴染」って事だな」

鈴「…………」

篇「そつか…………私が、最初なのか…………」

一 夏の言葉に鈴音さんは少し落ち込み、篇は嬉しそうだった

ん？まさか篇も…………なのかな？

その後も色々あつて昼食は終わった

夜、俺は自室で俺に話があると来ていたセシコアと話して、いた

「でも、蒼也さんの強化訓練も必要なのですね」「だから、一夏さんに勝つてもう一つ為セシリヤー

蒼也「ん、それは分かってるんだけどなあ・・・・・俺、一夏と戦うと大体引き分けるか負けてるし・・・」

俺と一夏はこれまで数回模擬戦をしているが俺は一回も勝った事が無い

蒼也「やつぱ一夏のあが俺には苦手なんだよなあ・・・・・」

そう言つた時、隣の部屋から大声が聞こえてきた

『とにかく――部屋は代わら
――自分の
に戻れ――!』

この声って……・ 篤の声だよな?

セシリ亞「篤さん、 一体なんで叫んでいるのでしょうか?」

蒼也「分からん」

『最つつづ低! 女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けない奴!! 犬に噛まれて死ね!!!』

バタンッ!!

蒼也「今のは……・ 鈴音わんの声か?」

セシリ亞「ええ、 そのようでしたわね……・

俺とセシリアはよくわからず、そのまま話を再開した・・・・・

それから数週間、時は進んで学年別トーナメントの日が訪れた
一回戦の一夏の相手、それは鈴音さんだった・・・・・

蒼也 side out

一夏 side

試合当日

今俺はアリーナ内でISを起動した状態で鈴と対峙していた

鈴のIS『甲龍』^{カクリョウ}、その機体は肩の横に浮いている棘付き装甲^{スパイク・アーマー}が攻撃的な姿勢をしているように思えた

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促され、俺と鈴は空中で5m程距離を開いて向き合つ

会話はISの解放回線^{オープン・チャンネル}で交わしていく

鈴「一夏、今謝るなら少しやらかし痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

一夏「雀の涙位だろ。そんなものいらねえよ、全力で来い」

こう言ひのには強がりでも何でもない理由がある。俺は真剣勝負で手を抜くのも、抜かれるのも嫌いだ

全力でやつて、初めてそこに意味が生まれる。勝負とはそういうものだ

鈴「一応言つておくけど、EISの絶対防御も完璧じゃないのよ。」「シールドエネルギー」を突破する攻撃力があれば、本体にもダメージを貫通させられる」

知つていい、どうやらHISの武装には操縦者に直接ダメージを与える「ためだけ」のものもあるらしい

まあ、それは規定で使えないらしいが

『それでは両者、試合を初めて下せ』

アナウンスの言葉の終わりと同時にビーツとブザーが鳴り響き、それが切れる瞬間に俺と鈴は動いた

ガギィイイイインッ！

俺が瞬時に展開した「ゆきひらひがた雪片式型」が物理的な衝撃で弾き返される

俺は数日前からセシリ亞に習っていたクロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回をビリにかこ

なし、鈴を正面に捉えた

鈴「ふうん、初撃を防ぐなんてやるじゃない」

鈴の手には両端に刃のついた、というよりもはに持ち手が付いている巨大な青竜刀……いや、それとか離れた形状の武器をバトンでも回すかのように持っていた

しかも、縦横無尽に鈴の手によつて斬り込んで来るだけではなく、高速回転している為、俺は刃をぶつけておぼくのにも苦労していた

一夏（不味い……）のままじや消耗戦だ。一度距離を

（

鈴「…………」

鈴の方のアーマーがスライドして開き、中心の球体が光った瞬間、俺は目に見えない衝撃に『殴り』飛ばされた

鈴「まだまだ、いまのはジャブだからね

ドンッ！

一夏「ぐあつーー？」

先ほどよりも強い衝撃に殴られ、俺は地表に打ちつけられた

」

一夏 side out

蒼也「なんだあれは……」

篠「ああ……」

俺と篠はピットからリアルタイムモニターで試合を見ながら囁いていた

セシリ亞「『衝撃砲』ですわね。空間に直接圧力をかけ砲身を生成、余剰で生じた衝撃自体を砲弾化して撃ち出す

」

同じくピット内にいたセシリ亞が俺と篠の疑問に答える

俺はそれを聞いていたが篠はモニターに映る一夏を見つめていた

蒼也（勝てよ一夏・・・・・お前を大事に思つている筈の為にも）

俺は一夏の勝利を願いつつモニターに意識を戻した

蒼也 side out

一夏 side

鈴「よくかわすじゃない。衝撃砲『龍砲』は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

砲撃の射線はあくまで一直線だ

しかし、操縦者である鈴の能力が俺を軽く凌駕している

基礎のものを、高いレベルで習得しているのだ

一夏（EISのハイパーセンサーに空間の歪み、大気の流れを探らせ
てるけど、これじゃ遅い。撃たれてからじゃ駄目だ。何処かで・・・
・・先手を打たないと！－）

その時、俺は右手に持つ雪片式型をぐっと握りしめながら、先週の
訓練を思い出していた

一夏「

『バリアー無効化攻撃』?

俺が効き返すと千冬姉が小さくつづく

千冬「『雪片』の特殊能力がそれだ。相手のバリアーに関係なく、それを切り裂いて本体に直接ダメージを与える事が出来る。そうすると、どうなるかわかるか、篠ノ之?」

俺の右横にいた筈に問う千冬姉

第「は、はい。ISの『絶対防衛』が発動して、結果大幅なシールドエネルギーを削ぐ事が出来ます」

蒼也「そうか……それなら、一発逆転が狙えるな

左横にいた蒼也が呟く

千冬「その通りだ。私がかつて世界一の座にいたのも、『雪片』の
その特殊能力によるところが大きい」

3年に一度行われるIASの世界大会『モンド・グロッソ』、その第
一回において優勝したのが千冬姉だ

初代世界最強の姉をもつ弟の気持ちは、とても複雑にして怪奇なん
だとそのときに身を持つて知った

セシリア「でしたら、やはり最後の一撃を喰らっていればわたくし
はまけていたのですか？」

千冬「ああ、だろうな。しかし、織斑がまけたのは必然だ」

一夏「え？ シールドエネルギーが0になつたから負けたんじや
」

千冬「馬鹿者。《雪片》の持つ特殊能力、それを行うにはどれほど
のエネルギーが必要になると思っている?」

一夏「あー・・・・・・・・

その言葉で俺は理解した

蒼也「つまり、自身のシールドエネルギーを攻撃に転化していると
?」

千冬「ああ、つまり白式は「欠陥機」だ」

一夏「け、欠陥機? 欠陥機つていったよな今!?」

その言葉に反応した千冬姉からの出席簿アタックが俺の頭にヒット
した

教師に対する言葉使いは気をつけよう・・・・・・

千冬「言い方が悪かつたな、「ISはそもそも完成していないのだから欠陥も何もない」。ただ、他のどの機体よりも攻撃に特化しているだけだ。大方、^{バズスロット}拡張領域も埋まっているのだろう?」

一夏「そ、それも欠陥だったのか……」

千冬「人の話を聞け。本来拡張領域用に空いているはずの処理を全て使って『雪片』を振るっているのだ。その威力は、ISの中でトップクラスだぞ?」

そういえば、千冬姉のISも『雪片』しかなかつたな……

千冬「大体、貴様のような素人が射撃戦闘が出来るのか?反動制御、弾道予測からの距離の取り方、それに

」

一夏「…………」めんなさい

俺は自分の非を認め、素直に謝つた

千冬「分かればいい、それに

」

千冬姉が俺をいつもの顔で見る

千冬「一つの事を極める方が、お前には向いてるだ。なにせ

私の弟だ

その後は訓練時間を近接訓練、急加速停止といった基礎移動技能に費やした

幸い、箒と行っていた剣道も『刀』の間合いと特性を再度理解するのに生かす事が出来た

一 夏（後は・・・負けなって気持ちで乗り越えてやるーーー）

俺は~~氣合~~をいれ、鈴を見つめる

一 夏「鈴」

鈴「な、なによ」

一 夏「本氣で行くからな」

真剣に鈴を見つめる

鈴は俺の気概に押されたのか、曖昧な表情を浮かべていた

鈴「な、なによ・・・・・そんなこと、当たり前じゃない・・・・・と、とにかく…格の違ひつてものを見せてあげるわよ…」

鈴はバトンのように両刀青竜刀を一回転させて構えなおす

一夏（この一週間で身に付けた「瞬間加速」、これと雪片一型の能
力。両方で一気に決める！！）

瞬間加速は出しどころを間違えなければ代表候補生クラスと渡り合えるほどの技術だ

俺は意識を集中させる

わずか一回限りの奇襲、俺はそれを決行した

その時

ズドオオオオオオオオオオオオオオオンッ！！！！

突然、アリーナ内に大きな衝撃が走った

一夏 side out

第4話 決戦！！ クラス対抗戦（リーグマッチ）（後書き）

長くなるので此処で一端切りました

次回も戦闘です

ではでは

第5話 専用機組ＶＳ謎のHS---

一夏 side

な、なんだ！？

俺と鈴は同時にアリーナの中心を見る

鈴「一夏、試合は中止よー！すぐ元気で戻ってきてーー！」

一夏「え・・・・？」

警告。ステージ中央に熱源、所属不明のHSと断定。ロックされています

一夏「なつー？」

破られたアリーナはISと同じもので作られている。つまり「それを貫通し、破壊できるだけの攻撃力を持つた機体が此方をロックしている」

鈴「一夏、早く…！」

一夏「お前はどうすんだ、鈴！？」

鈴「あたしが時間を稼ぐ、その間にあんたは逃げて…！」

一夏「なつ…・女を置いて逃げるかよ…！」

鈴「仕方ないでしょ！？あんたの方が弱いんだから…！」

くそつ・・・・・なんで俺は・・・・・！

鈴「別に、あたしも最後までやつらつもつは無いわよ。こんな異常事態、先生達が来てすぐに收拾してくれ」

「…ま、まざい…！」

一夏「あぶねえ！！」

俺が鈴の身体を抱えて横に移動する

その後、俺達がいた空間が熱線で砲撃された

一夏「嘘だろ…？セシリ亞の武器より威力が上じやねえか…
…」

ISに付いているハイパーセンサーの簡易解析で熱戦の熱量を知った俺は冷や汗を流した

鈴「つ~~~~~、せ、早く離しなれこよーー馬鹿ーー。」

一 夏「おあ、おこ暴れるなよーー。

つて馬鹿、殴るなーー。」

鈴「う、いぬかこいぬかこいぬかこーーー。」

シールドエネルギーで守りいでいる中の殴りいでいるところの事実に変わりは無かった

鈴「だ、だいたいあんたは何処触つて

」

一 夏「く、来るぞーー。」

再び放たれた砲撃を避け、アリーナの中心を見るとそこには異形が存在していた

一 夏「なんだよ、あれ…………」

異形と並んで理由は、特異とも言える「フル・スキン全身装甲」だった

一 夏「お前、何者だよ」

? 「・・・・・・・・・・・・

上がつてきた来た異形のHISU一夏が問いつが何も答えない

真耶《織斑君ー鳳さん!! 今すぐアリーナから脱出してくださいー!
すぐに先生達がHISUで制圧に行きます!!》

HISUの回線に山田先生がいつもより威厳のある声で加入してきた
けど

一 夏「

いや、先生達が来るまで俺と鈴で食いとめます」

山田先生が驚いているのを無視して俺は抱きかかえている鈴を見る

一 夏「いいな、鈴？」

鈴「だ、誰に言つてんのよ……そ、それより離しなさいってば……動けないじゃない！！」

おっと、忘れてた

俺は鈴を離すと、鈴は顔を真っ赤にして自分身体を抱きしめていた

真耶《織斑君！？だ、駄目ですよ！…生徒さんにもしもの事があつたら》

山田先生の言葉はそこで途切れ、俺と鈴は敵I-Sの突進を回避して

いた

鈴「ふん、向こうせやる『満々みたいね』」

一 夏「やつみたいだな」

俺と鈴はそれぞれの武器を構えなおす

鈴「一 夏、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさい。武器、それしかないんでしょ？」

一 夏「ああ、その通りだ。頼むぞ鈴。それでいくか」

互いの武器の切つ先を並べる

それが合図となり、俺達は即席の「ハピネーション飛び出した

一夏 side out

蒼也 side

真耶「もしもし織斑君！？聞いてます！？鳳さんもー聞いてますー！？」

返事が聞こえなくなつた2人に對し必死に叫ぶ山田先生

既に通信は聞こえてないんですが・・・。

千冬「本人達がやると言つているのだから、やらせてみてもういいだろう」

真耶「お、お、織斑先生！？なにのんきなことを言つてるんですか！」

千冬「落ち着け、コーヒーでも飲め。糖分が足りてないぞ？」

セシリ亞「せ、先生……？それ、塩ですよ？」

千冬「…………」

織斑先生がコーヒーに運んでいたスプーンを止め、箱に粒を戻す

すでにいくらかはコーヒーの中に入ってしまったが……

千冬「何故塩が此處にある…………？」

真耶「や、 やあ・・・・・あ…で、 でもそんな簡単なミスをする
つてことせやつぱり衆さんの事が心配

」

千冬「・・・・・・・・・・・・・・

山田先生の言葉でピット内に嫌な沈黙が流れる

もつひし空氣読んでください、 山田先生・・・・・・

れて・・・・

千冬「・・・・・待て、 御剣」

御剣「・・・・・・

ピットから退出しようとしていた俺に気づいた織斑先生が俺を呼び
とめる

千冬「それにオルコット、貴様も何処に行こうとしているね？」

訂正、セシリアも俺と同じで退出しようとした

セシリア「一夏さんと凰さんを助けに
」

千冬「駄目だ、貴様たちの武装では、今のよつたな他対一の戦闘には
向かん。それに、そのよつたな訓練もしていまー？」

セシリア「つ
」

凶星を突かれ、黙つてしまふセシリア

それでも俺は歩き、扉の前に立つ

蒼也「俺は・・・・・あいつのように主人公キャラなんて出来ない」

蒼也「でも・・・・・そんな奴をサポートする位なら、俺だって
出来る。俺は・・・・・そういう生き方をするって決めているから・
・・・・・いくぞ、セシリア」

俺はそのまま扉を開けて廊下にでる

セシリ亞「ま、待つて下さいな蒼也さん…」

セシリ亞は蒼也の後を追い始めた

蒼也「一夏、聞こえるかー?」

一夏『蒼也！？なんだ！？』

蒼也「俺が考えた作戦がある、よく聞いてくれ……」

俺は廊下を走りアリーナに出れる場所を手指しながら一夏に作戦を話した・・・・・

一夏『俺も同じ事を考えてた、蒼也。それで行こう』

蒼也「（やつぱりな・・・・）ああ、俺とセシリアももうすぐ着く所だ」

セシリア「はあ・・・・はあ、一夏さん！失敗は許されませんわよ
！！」

一夏『ああ、頼んだぞ2人ともーー！』

一夏との回線を切り、目的地に急ぐ俺達

一夏・・・・・やっぱ、お前は主人公だよ・・・・・俺には、
そんな事出来やしない・・・・

蒼也 side out

鈴「話は・・・・終わったのつー？」

敵ISの砲撃を避けながら鈴が聞いてくる

一夏「ああー！いいか

」

俺は蒼也と話した作戦を鈴に伝える

鈴「でも、それはあれが「無人機」っていうのが前提よ？あんた達のその勘、信じていいのよね？」

俺と鈴は戦闘中に敵I-Sのある事を気にしていた

それは動きがあまりにも「機械じみてる」事だ

本来I-Sは人が乗らないと動かない

だけど例外は存在する、俺と蒼也がそのいい例だ

鈴「ひやんと当てなきことよ一夏、あたしはあんたが

」

一夏「大丈夫だ、俺はお前を信じてる

鈴「つ

行くわよ

一夏「ああ

」

その時、アリーナ内に1人の声が響いた

篠「何をやつている一夏あつ！…」

アリーナのスピーカーから聞こえてきた声は篠のものだった

俺はすぐに中継室を見る

篠「男なら・・・・・男なら、その位の敵に勝てなくてなんとする
！！！」

しかし、その簫の行動に敵IISが興味を持った

しつかりと簫の方を向いている・・・・・・

一夏「やばいっ……鈴…やれ……！」

鈴「う、うさつ……！」

鈴が肩を押し出すような格好で衝撃砲を構える

そして、最大出力砲撃を行うため、補佐用の力場展開翼が後部に広がる

そして俺は「鈴の砲撃の射線上」に移動した

簡単には、「俺は鈴の正面に背を向けて構えている

鈴「しつかり・・・・・・決めなさい……！」

一夏「ああ……！」

鈴の衝撃砲が発射され、俺の背中に当たる

俺はそれを受けて瞬間加速イグレッショングーストを作動させる

瞬間加速の原理は「後部スラスターからエネルギーを放出し、それを内部に一度取り込み、圧縮して放送出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的ぬ加速する」

一夏「オオオオオツーーー！」

俺の声と同時に右手の雪片一型が強く光り出す

そう、雪片の能力「零落白夜」だ

零落白夜を使用可能、エネルギー転換率90%オーバー

俺はその情報を聞くではなく理解していた

初めてIISに触れた時に感じた一体感、それと同じ感じだった

一夏（俺は・・・千冬姉を、箒を、鈴を、関わる人全てを
守るーー）

そして、零落白夜を発動した雪片一型は敵IISの右腕を斬り落とした
しかし、俺は左拳をもろに受け、むらたけは追撃の砲撃の対象にされる

箒・鈴「一夏つーー！」

大丈夫だ、後は・・・・・あいつらがやってくれる

そうだろ？蒼也、セシリアーーー！

蒼也「ああーー！」

セシリア「これで完璧ですわーーー！」

唯一に残っていたアリーナにつながる入り口から2人の声が聞こえる

2人は既に全武装の発射態勢を終えていた

セシリ亞「喰らいなさい……！」

蒼也「ハイマットフルバースト……発射ああああああああ
！！！」

セシリ亞と蒼也、お互い5つの砲身。計10つもの砲撃が敵ISに吸い込まれた

爆発を起こし、敵ISはアリーナの地上に落下した

蒼也「全く……お前は、やっぱ主人公だな」

一夏「そんなんじゃねえよ、俺は」

通信で話しかけてきた蒼也と話す俺

鈴「一夏！？あんた大丈夫なの！？」

鈴が俺の横に来て心配そうな顔をする

一夏「ああ、大丈夫だ」

蒼也「ま、セシリアもいってます。蒼也さん」

しかし

セシリア「あ、ありがとうございます。蒼也さん」

敵I-Sの再起動を確認！警告！ロックをされています！！

一夏「！？」

片方だけ残っていた左腕、それを最大出力携帯に変形させた敵I-Sが地上から俺を狙っていた

そして、俺にビームが迫ってくる

俺はためらいなく光の中に飛び込んだ

一瞬、青と白の色が見えそれも俺と同じ様に敵I-Sの装甲を貫いていた

・・・・・ なんだ?人の気配を感じるぞ・・・・・?

夏
—

その声はすぐ前から聞こえ、誰のものかもはつきりと分かつた

一夏「鈴」

鈴「ひやう！？」

俺が目を開けると鈴の顔がすぐそこにあつた

俺の顔との距離は約3cm程だった

顔を赤くして顔を離す鈴

一 夏 「あ、ああ・お前の声で田が覚めてな

鈴 「そ、そう・・・・・」

鈴はビビりか残念がりついていた

一 夏 「あのセ・・・・・その、いろいろ悪かった。すまん

鈴 「一 夏・・・・・」

何を謝つているのか理解した鈴は俺をじっと見つめる

一 夏 「ちやんと覚えて入れなくてすまなかつた。でも、今思い出し

たよ

鈴「えつ・・・・・」

一夏「料理が上達したら、毎日あたしの酢豚食べてくれる?」だ
ろ?ホント?」めんな、今今まで忘れてて」

鈴「あう・・・・ベ、別にいいわよーー」

一夏「それに、俺は約束の意味も間違えてたみたいだな。なあ、ホ
ントはどういう意味なんだ?」

鈴「そ、そんな事言えるわけないでしょ!?」

鈴は先ほどよりも顔を真っ赤にして言った

風邪でも引いたのか?

「夏」

」

ふと俺は夕暮れに染まつた外を見る

一夏（俺は、守れたんだよな。皆を

）

夕暮れに染まつた空はとても綺麗に、そして闇に染まりかけていた・

・・・・

一夏 side out

セシリ亞 side

保健室の前まで来ましたが一夏さんは大丈夫のようですね

蒼也「一夏は平氣みたいだな」

私の横で廊下の壁に背を預けている蒼也さんがそう言ひ

蒼也「あいつは、俺なんかが敵わない程強い・・・・」

セシリ亞「で、でも蒼也さんのハイマットに一夏さんは敵いませんわ。それに、雪片の能力に気を付けていれば蒼也さんなら勝てますわ！」

蒼也「そりぢやない…………あいつは、心が強いんだ……」

・

セシリ亞「えつ・・・・・・・・」

蒼也さんはそつと歩いて歩いて行ってしまった

セシリ亞「でも・・・・・わたくしは蒼也さん、あなたの方が強
いと思つてますわ。だからこそ、わたくしはあなたに

「

セシリ亞の言葉は最後まで聞こえなかつた

セシリ亞 side out

何処か暗い部屋

幾つもの画面にコンピューターが作動している部屋に敵ISの残骸
はあつた

真耶「これはやはり無人機でした。コアも未登録のものです・・・」

・・・

千冬「・・・・・そつか」

真耶と千冬は画面を見ながら話していた

真耶「どのような方法で動いていたかは分かりません。しかし、織
斑君と御剣君の最後の一撃で機能中枢が焼き切られていきました」

千冬「…………」

真耶「な、なにか心当たつても？」

千冬「いや、ない

今はまだ、な

画面を見る千冬の目には彼女の現役時代を思わせるような鋭い瞳があつた

蒼也「織斑先生、俺の部屋にベッドが一つ追加されていたんですが。
・・・・・」

数日後、いきなり部屋に置かれていた新しいベッドの詳細を聞く為に蒼やは職員室の千冬の元を訪れていた

千冬「ああ、実は転校生がうちのクラスに来る。そのため、1人部屋だったお前の部屋に入る事になった」

蒼也「転校生、ですか・・・・・」

千冬「ああ、まだ誰にも言つなよ?とはいっても、すぐにばれるだろ?がな・・・・・」

蒼也「女子の情報源は凄いですからね・・・・・」

2人は苦笑いをしていた・・・・・

? 「・・・・・・・・・・・・」

銀色の髪の少女がＩＳ学園の校門に立っていた

彼女の左目には眼帯がされており、彼女から発せられる雰囲気は軍人を思わせた

? 「此処に・・・奴がいる、教官に汚点をつけた張本人、織斑一
夏が・・・・・」

その少女はそのままIHS学園の中に歩いて行った

そして、その少女がいなくなつてから数分後

? 「此処が、IHS学園…………」

金色の髪をなびかせた青年がIHS学園の校門に立つていた

? 「…………」

その青年は例えるなら「貴公子」と云ふのが一番似合つてこの雰囲
気だった・・・・・

第5話 専用機組VS謎のHS---

(後書き)

どうも天照大神です

最後の2人がいよいよ次回から書けます！！！

此処まで良く頑張った・・・・・・

では、次回もお楽しみに！――！

第6話 転校生、新たな男子と銀髪の少女（前書き）

今回は短めです

そしてカットしききました・・・・・

第6話 転校生、新たな男子と銀髪の少女

蒼也 side

後日、一組の女子は朝のH.Rで言葉を失っていた

それもその筈だ・・・・・・

? 「シャルル・デュノアです。フランスから来ました、この国では不慣れな事も多いかと思いますが皆さん宜しくお願いします」

黒板の前に金髪の男子が礼儀正しく自己紹介をしているのだから

「あ、男・・・・・・?」

クラスの女子の誰からそんな声が漏れる

シャルル「はい。此方に僕と同じ境遇の方が2人いると聞いて本国から転入を

」

俺はその瞬間、両手で耳を塞いだ

「さや」

シャルル「はい？」

「　　「さやあ

」　　」

ほら来た、女子達の必殺技。歓喜のソニッケウェーブ

「男子！…3人目の中子！…！」

「しかもひびのクラス！…」

「美系！…守つてあげたくなる系の！…」

「地球に産まれて良かつた~~~~~！」

三者三様、いや四者四様だなこりゃ

千冬「あー、騒ぐな。静かにしろ」

真耶「そうですね、まだ自己紹介は終わってませんよ」

そう、転校生は2人いる

シャルルの隣には輝くような銀髪、それを腰近くまで降ろし左目に黒い眼帯をつけている女子が立っている

右目は赤色だが、暖かいと云ふよりは冷たい感じがある

千冬「挨拶しろ、リカ！」

? 「はい、教官」

「ラウラと呼ばれたその女子が織斑先生の言葉に答え、教室を見渡す

? 「ラウラ・ボーテヴィッヒだ」

その後の言葉を誰もが待っていたが一向に言葉は発せられないと

真耶「あ、あの……」

ラウラ「以上だ」

ああ、終わりなのね

俺がそう思っていた時、ラウラが一夏の前まで歩いて行く

バシンツー！！

蒼也「！？」

一夏はラウラの手から平手打ちを喰らつっていた

当の本人も何が起きたのか分からぬようだ

ラウラ「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるもの
か」

一夏「いきなり何しやがる！？！」

ラウラ「ふん・・・・・・」

一夏が我に返りラウラに詰つたがラウラは無視して元の位置に戻った

千冬「あー・・・・今日の授業は一組と合同でHSの模擬戦を行つ。各自、着替えて第一グラウンドに集合だ」

織斑先生の言葉に皆が準備を始める

千冬「織斑、御剣。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だしつ」

織斑先生と山田先生が教室から出て行くと同時にシャルルが俺と一夏の所に来た

シャルル「君達が織斑君と御剣君? 初めまして、僕は

「

一夏「話は後だ、いくぞ蒼也!」

蒼也「ああー!」

シャルル「へ？」

俺はシャルルの手を取つて一夏と共に教室から出る

一夏「女子が教室で着替えるから、俺達は空いてるアリーナの更衣室で着替えるんだ」

蒼也「で、急がないと奴らが来る・・・・」

シャルル「奴ら・・・・？」

俺達が階段を下りて一階に向かおうとする

しかし

「ああっ！－－転校生発見！－！」

「しかも織斑君と御剣君も一緒！！」

「男子3人！？これは是非挙まないと……！」

ほら来た・・・・・

シャルル「え、えっと・・・・・？」

蒼也「この学園で男は俺達3人。女子はそれ以外・・・・・これで分かっただろ？」

一夏「急ぐぞ蒼也。時間がやばくなる」

蒼也「ああ、そうだな」

俺達は今だ混乱しているシャルルの手を引っ張つてアリーナの更衣室まで走つていった

一夏の周りにいた俺らはしつかりと回避し、一夏は落ちてきた山田先生の突撃を喰らっていた

一夏「へつ？」

真耶「ああああ―――っ！…び、びこて下さ――――――！」？」

しかし、途中で空から音が聞こえてきた

アリーナに到着し織斑先生からおしゃりを受けた俺達は織斑先生から話を聞いていた

その時の出来事で筈と鈴に殺されかけたのを此処に記しておこう。・
・・・・・

その後、山田先生対セシリヤ・鈴の模擬戦が行われたが山田先生が
2人を圧倒して終わった

千冬「専用機持ちは織斑、御剣、デュノア、オルコット、ボーデヴ
イッヒ、凰だな。では、グループに別れて実習を行う。各グループ
のリーダーは専用機持ちがやる事。いいな！」

その言葉で女子が俺達男子の元に群がる

「織斑君、私に教えて！！」

「御剣君、私は御剣君に教えてもらいたい！！」

「デュノア君、私に教導して～～～～～！」

その状態に呆れた織斑先生から雷が落ちた

千冬「この馬鹿者どもが・・・・出席番号順に1人ずつグループに入れ！！順番はさつき言つた通りだ！！すぐに行動しない者にはグラウンド100周だ！！」

女子の皆はすぐに行動し、実習が始まった

流石織斑先生、生徒に容赦ない・・・・・

時は進み昼休み、俺達は屋上にいた

第「・・・ビリ」の事だ?」

一 夏「?」

一 夏の左隣にいた第から声が漏れる

一 夏「天気が良いから屋上で食べるって話だったろ?」

第「そうではなくてだな・・・・・!」

第が自分の左側にいる鈴、セシリアを見る

ちなみに俺達は屋上で円になつて座つており

時計回りで俺、シャルル、一夏、第、鈴、セシリアの順で座つている

一 夏「せっかくの昼飯だし、大勢で食つた方がうまいだろ。それに
シャルルは転校して来たばつかで右も左も分からぬだらうし

鈴「そ、それはそうだが・・・・・・」

一夏「・・・・・・・・ 鈍感にも程があるだろ

鈴がため息を吐いてるぞ・・・・・・

鈴「ふふん一夏。私はね、今日はこれを作ってきたのよ」

鈴がタッパーのふたを外すと一夏に渡した

一夏「おお、酢豚だ！」

鈴「そ、あんたこの前食べたいって言つてたし」

鈴はそうこうして、『』飯の入った容器を自分の元に置く

一夏のタッパーには酢豚しか無いぞ……？

セシリア「蒼也さん、わたくしも用意してみました。よろしけれ
ばどうぞ」

バスケットを開き、サンドイッチを一つとつて俺に渡すセシリア

蒼也「お、ありがとうございます」

俺はそれを口に運び噛みしめる

そして俺は意識を手放した

気がついた時には既に授業は終わっており教室にはシャルルとセシリ亞が俺を不安そうに見ていた

蒼也「俺は・・・・・？」

シャルル「大丈夫蒼也？急に気絶したから昏迷してたんだよ？」

セシリ亞「幸い、近くにいた保険の先生に容体を確認してもらいまして・・・・・ただ気絶しているだけだったみたいでしたので一夏さんが教室まで運んだんですわ」

蒼也「そつか・・・・・後で一夏には礼を言わないとな

俺はバックを持って椅子から立ち上がる

蒼也「で、セシリアは分かるが何でシャルルがいるんだ？」

シャルル「えっと……僕は蒼也と同室なんだ。でも、鍵は蒼也が持ってるようだからこうして待ってたんだ」

蒼也「そうか、それは悪かった。んじゃ、行くか

シャルル・セシリア「うん（はい）」

俺達は雑談をしながら寮に向かった

第7話 打ち解けた重み（前書き）

いつも天照大神です

地震の起きた惨状に困っている私です・・・・・

なんとかこの話を書き上げました

どうぞ、『読みください

第7話 打ち解けた重み

一夏 side

シャルルが転校してきてから5日

土曜日でもIIS学園では授業が存在する

しかし、それも午前のみであり午後は完全な自由時間なのだ

俺達は全面開放されているアリーナを使って実習をしていた

シャルル「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

一夏「そうなのか？一応、分かつてるつもりだつたんだけど……。
・」

俺はシャルルと軽く手合わせした後にレクチャーを受けていた

シャルル「最近は蒼也にも勝てなくなってきたでしょ？」

一夏「うつ・・・・・」

ここ数日、蒼也と模擬戦をすると大抵ハイマット・フルバーストで落とされている

瞬間加速すら読まれていて、だ

シャルル「それに・・・・・3人の説明じや、誰だつて理解しづらいよ・・・・・」

俺と蒼也にこれまでレクチャーしてきた3人は

笄『こいつ、すばーっとやってから、がきんつーどかんつー』という感じだ『

鈴『なんとなく分かるでしょ？ 感覚よ感覚。・・・・・はあ、な
んで分かんないのよバカ』

セシリ亞『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度回転ですわ』

皆さんはこれですぐに実行出来ますか？

一夏（大体なあ・・・・・）「Sステッジの露出が高すぎるんだよ・・・・・）

蒼也「どうした一夏？」

セシリ亞と話していた蒼也がいつの間にか俺の横に来ていた

一夏「はあ・・・・・なあ、お前は平氣なのかよ？」

蒼也「？何がだ？」

俺は周りに聞こえなこよつて蒼也で黙つ

一 夏「お前はエスースのあの露出を見て平気なのかよ?」

蒼也「ああ・・・・・もう、慣れた」

一 夏「慣れたって・・・・・」

蒼也「あまり意識してると思つよつて動けなくなるからな、気にしていなかつたら平氣になつていた」

一 夏「そ、そつか・・・・・」

俺には出来ん・・・・・

シャルル「一夏の「白式」つて後付武装^{イフリイザ}が無いんだよね?」

おっと、シャルルのレクチャーの途中だつた

一夏「ああ。何回か調べてもらつたんだけど、^{インストール}拡張領域が空いてないらしい。だから量子変換は無理だつてさ」

シャルル「多分だけど、それってワンオフ・アビリティーの方に容量を使つていいからだよ」

蒼也「一夏のワンオフ・アビリティー……あれか

一夏「えっと……ワンオフ・アビリティーってなんだけ?」

シャルル「言葉通り、唯一^{ワンオフ}使用の特殊才能だよ。本来なら、第一形態^{セカンド・フ}から発言するんだけどね……」

一夏「て」とは・・・・・白式の誰一使用せよぱつ「零落白夜」
なのか?」

シャルル「だらうね。白式は本当に不思議だよ、それこ・・・・・
」

蒼也「織斑先生が使っていたE.S「ブリュンヒルデ」と同じ能力・
・・・だら?」

シャルル「うん、普通・・・・・そんな事は起きた事は無いんだけ
どね」

一夏「ま、今考えなくたって大丈夫だろ」

シャルル「そうだね。じゃあ、射撃武器の練習してみようか。はい」

シャルルはそう言って俺にさつきまで使っていた五五口径アサルト
ライフル《ヴァント》を手渡した

一夏「あれ？他の奴の装備つて使えないんじゃないのか？」

シャルル「普通はね。でも、所有者が使用許諾すれば使えるんだよ。アンロック
今、一夏の白式に使用許諾を発行したから、試しに撃つてみて」

一夏「おひ

俺はシャルルのレクチャーを聞きながら練習を始めた

一夏 side out

蒼也 side

一夏がシャルルのレクチャーを受けている間

セシリ亞「まつたく・・・・・わたしの理論整然とした説明の何が不満だというのかしら・・・・・」

鈴「ふん。私の話をちゃんと聞いていないのもそうだ」

鈴「あんなに分かりやすく教えてあげたのに、なによ・・・・・・・・」

俺は3人の愚痴に付き合っていた

セシリ亞「まつたく・・・・・蒼也さんは話を聞いて実行出来ました
のこ・・・・」

「蒼也」「いや…………俺は

範」「まつたく…………あにつけたるんでいる」

蒼也「あのー…………

鈴「バカ一夏…………」

蒼也（おーい一夏、俺には対処出来ねえわ…………）

その時

「ねえ、ちよつとアレ…………」

「ウソつ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でトライアル段階って聞いてたけど……」

アリーナ内の女子のざわつきが聞こえ、俺は注目的に視線を移す

ラウラ「…………」

そこにいたのはもう1人の転校生、ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィッヒだった

ラウラ「おい

一夏の元にラウラがTBSの開放回線を繋げていた

オープン・チャンネル

一夏「…………なんだよ」

一夏は気が進まない表情で答えていた

「ラウラ、貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い、私と戦え」

一夏「嫌だ、理由がねえよ」

「ラウラ、貴様には無くても私にはある」

蒼也（あいつの理由……織斑先生関係か？）

一夏「千冬姉の……『モンド・グロッソ』決勝戦の不戦敗
か」

ラウラ「そうだ。貴様がいなければ教官が大会一連覇の偉業を成し
えただろ？」とは容易に想像できる。だから、私は貴様を

「貴様の存在を認めない」

その瞬間、ラウラは自身の漆黒のISを戦闘態勢へシフトさせ、左肩に装備された実弾砲を発射した

「ゴガギンッ！」

シャルル「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めるなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね」

蒼也「俺の友人にいきなり手を出されたら、俺だって見過せないな」

「ラウラ、貴様」

間合いから割り込んできたシャルルがシールドで実弾を弾き、同時に右腕に六一口径アサルトカノン『ガルム』を展開してラウラに向けていた

俺はラウラの後ろから ラケルタ・ビームサーべルをラウラの首筋に添えていた

『ナージの生徒一何をやつてこるー学年とクラス、出席番号を言えー。』

『』

アリーナ内に声が響き渡る

どうやら騒ぎを聞きつけた先生のよつだ

「ウラ・・・・・ふん。今日は引ひつ

ラウラはあつさつと戦闘態勢を解除してアリーナゲートに歩いて行つた

俺はそれを見送つてグラウンドの一夏とシャルルの側に降りる

シャルル「一夏、大丈夫？」

一夏「ああ、助かったよ。ありがとなシャルル、蒼也」

蒼也「なに、友人を助けるのは当たり前だろ?」

シャルル「今日はもう上がるっか。アリーナの閉館時間も近いしね」

蒼也「そうだな」

シャルル「えっと・・・先に着替えて戻つて」

一夏「なあシャルル、なんで俺達と一緒に着替えないんだ?」

一夏の言つとおり、シャルルは今まで俺達と時間をずらして着替え
ていた

シャルル「えっと・・・」

鈴「はいはい、あんた達はやつと行きなさい」

一夏「り、鈴・・・・・首筋、掴むな・・・・・」

蒼也「ああ、じゃあ先にいってるぞシャルル」

シャルル「うん」

俺は鈴から一夏を受け取り、更衣室に引きずつていった

真耶「あのー織斑君、御剣君、デュノア君はいますかー？」

着替え終えて間もなく、外のドアから山田先生の声が聞こえてきた

一夏「はい？えーと、織斑と御剣はいます」

真耶「入つても大丈夫ですかー？まだ着替え中だつたりしますー？」

蒼也「いえ、俺も一夏も丁度おわった所ですよ」

真耶「そうですかー。それでは失礼しますねー」

ドアが開き、山田先生が入つてきて俺達の前に歩いてくる

真耶「ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。
時間別にすると色々問題が起るので週に2回といつ事になります」

蒼也「まあ・・・・・そつだらうな

一夏「本当ですか！？嬉しいです、助かります！」

真耶「い、いえ・・・・・」

山田先生の両手を歓喜のあまり握りしめる一夏

山田先生は急な事に顔を赤くしている

シャルル「なんでもまいるの一夏、蒼也・・・・・」

後ろから冷たい声のシャルルが話しかけてきた

蒼也「えっと……その……」

真耶「そ、そうそう!! 織斑君と御剣君は今から職員室に来て下さい!! お一人のエラについての書類を書いてもらひます」

一夏「あ、分かりました」

蒼也「じゃあシャルル、遅くなりそうだし今日は先にシャワー浴びててくれ」

シャルル「分かつた……」

俺は一夏と一緒に山田先生について行つた

蒼也「ふう、終わった」

一夏「蒼也。この前話したボディーソープ、持つて来たぞ」

蒼也「サンキュー」

部屋の中に入ってきた一夏からボディーソープを受け取る

一夏「ん？シャルルがシャワー使つてるのか？」

蒼也「そつみたいだな。せつかくだし、これを使ってもいいつか

俺は椅子から立ち上がりボディーソープを持つてシャワールームと
繋がっている洗面所兼脱衣所な洗面所へのドアを開ける

ガチャ

蒼也（ん？ シャルルはもう出たのか？）

シャルル「あ・・・・・」

蒼也「シャルル、ちょうど良かつた。これ、いち・・・・か・・・
から」

シャルル「そ、そつ・・・・せ？」

蒼也「な・・・・・」

女子だと分かつた理由は簡単、胸があるからだ

女の子は胸を手で隠しながらシャワールームに逃げ込む

蒼也「えつと・・・・・その・・・・ボディーソープ、此処に置いておくぞ」

シャルル？「う、うん・・・・・・・ / / / / / / /

俺はそのまま部屋に戻る

一 夏「ど、どうした蒼也?」

蒼也「…………女子がいた」

一 夏「は…………?」

一 夏の疑問もすぐに解決するだろ?つ

彼女が出てくれば…………

シャルル？「あ、上がつたよ・・・・・・」

一夏「ほら、シャルルの声・・・・・・じや」

蒼也「・・・・・・・・・・」

出てきたシャルル？を見て一夏も声を失う

そこには、女子が立っていたからだ・・・・・・

蒼也「あー・・・・・お茶でも飲むか？」

シャルル？「う、うん・・・・・・」

シャルル？は自分のベッドに腰掛け、俺は置いてある電気ケトルで
お湯を沸かす

一 夏は横の椅子に座つている

蒼也「ほひ、氣をつかうよ」

俺は熱いお茶をシャルル?に渡す

シャルル?「あ、ありが

渡す際にシャルル?の指が俺の手に触れる

シャルル?「きやあつ!?

蒼也「うおっ!?

手をひっこめたシャルル?にかかりそうになつた零れたお茶を手で
ガードしたが思いつきりお茶がかかつてしまつた

蒼也「やべつ……すぐに冷やせなこと……」

俺は急いで水道の所に行き流れ出した見事に手を洗う

一夏「大丈夫か、蒼也？」

蒼也「あ、ああ」

シャルル「『』、『』めん！――大丈夫！――？」

蒼也「ああ、すぐに冷やしたし火傷にはならないだろ」

シャルル「ちょっと見せて……ああ、赤くなってる……」

軽くパニックになつてゐるのかシャルル？は俺の側に来て強引に手を取る

シャルル？「でも・・・・・」

蒼也「その・・・・・さつきから、当たつてゐんだが・・・・・」
「/ / / / /」

シャルル？「！――！」

言われて体勢に気づいたシャルル？は俺から離れて胸を隠すよつて自身の身体を抱きしめる

シャルル？「心配してゐるのに・・・・・蒼也のエッチ・・・・・」
「/ / / /」

蒼也「うつ・・・・・すまん」

それから数分後、お互に落ち着いた俺達は話し始めた

一 夏「なあ・・・お前、やつぱりシャルル・・・なんだよな?」

シャルル?「うん・・・そつだよ」

一 夏「なんで男のフリなんかしてたんだ?」

シャルル「その・・・実家からそつしりつて言われて・・・」

蒼也「・・・デュノア社の所長か」

シャルル「うん、社長・・・父からの直接の命令なんだ」

一夏「なんでそんな事

」

シャルル「僕はね・・・・父の、本当の子じゃないんだ」

蒼也「一夏「！？」

シャルル「僕は愛人の子で・・・・お母さんが2年前無くなった時に、引き取られたんだ」

蒼也「・・・・・」

シャルル「検査の結果、僕はES敵応能力が高いって事が分かって、デュノア社のテストパイロットをする事になったんだ」

一夏「・・・・・」

シャルル「でも……暫くして、『デュノア社は経営危機に陥つた』

一夏「えつ……でも、確か『デュノア社は世界量産機ISM製造第3位』だつたはずだろ?」

シャルル「そうだけど、僕が使つてゐるリヴィアイヴは結局第一世代型なんだよ。他の国は第三世代型……だから、危機になつたんだ」

一夏「そつか……」

シャルル「僕が男装してたのは、『デュノア社が注目を浴びる為の広告塔、それに

「

蒼也「俺達の……データ、か

一夏「なつ・・・・・」

シャルル「うん・・・・・ 同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータもとれるだろう・・・・・つて」

一夏「そんな・・・・・」

一通り話し終えたシャルルは一息ついた

その顔は何処かふつきれていた表情だった

シャルル「とまあ、そんな所かな。でも、2人にばれちゃったし、きっと本国に呼び戻されてデュノア社は消滅・・・もしくは何処かの傘下に入るだろうね・・・・でも、僕には関係ないかな」

蒼也・一夏「・・・・・・・・」

シャルル「なんだか話したら楽になつたよ。聞いてくれて有難う、それに・・・・・騙しててごめんね」

一夏「…………いいの」

蒼也「いいのか、それで…………？」

シャルル「え…………？」

一夏が言いつ前に蒼也の口から言葉が出てきた

蒼也「お前は…………それでいいのか？親だからって子供の自由を…………行動を奪う権利なんてあるもんか！――！」

シャルル「そ、蒼也…………？」

蒼也「シャルルはこれからどうしたい？」

シャルル「分からないよ・・・・時間の問題、だと思つ。フランス政府もこの事をしつたら黙つてないだうし、僕は代表候補生を降ろされて・・・よくて牢屋行きかな？」

蒼也「だつたら此処にいろ！」

シャルル「え？」

蒼也「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に属さない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

シャルル「あ・・・・・」

蒼也「つまり、3年間は此処にいても大丈夫だ。探してやるよ、なんとかなる方法は存在するぞ」

シャルル「ふふつ・・・・・・ありがと、蒼也」

シャルルは笑つて答える

その笑顔は年相応の女の子の笑顔だった

一 夏「俺も協力する、なんとかなるさ」

俺はシャルルと顔を合わせるのが少し恥ずかしくなり、目をそらしていったが再度視線を向けた際に目が合ってしまった

シャルル「どうしたの？」

蒼也 い、いや・・・・・」

顔を覗き込んできたシャルルの顔と、襟元から見えていた胸の谷間に心臓の鼓動が速くなる

「と、とりあえず一端離れてくれシャルル・・・・・」

シャルル「？」

蒼也「いや・・・その、胸元が//////」

シャルル「！？／／／／／／／／

指摘されたシャルルは頬を赤らめる

シャルル「さつきから蒼也・・・胸ばつか気にしているけど・・・
み、見たいの？／＼／＼／＼／＼

蒼也「・・・はい？」

俺がシャルルの言葉に口惑つていると

「ンンン

蒼也・一夏・シャルル「！？」

部屋の扉がノックされた音が聞こえた

蒼也 side out

第8話 救われた心と好意（前書き）

どうも天照大神です

今回の話はあれですね、シャルル可愛いよシャルル

それだけは譲れないですね

アニメ見た人は分かりますよね

では、本編をどうぞ

第8話 救われた心と好意

蒼也 side

セシリア「蒼也さん、いらっしゃいます？夕食をまだ取られていないようですけど、何処か具合でもわるいのですか？」

「どうやらノックをしたのはセシリアのみよつだ

セシリア「蒼也さん？入りますわよ？」

蒼也
まわーまわーまわーまわー……

シャルル「ど、どうしてよ、」

一夏「と、とりあえず隠れり」

シャルル「わ、分かつた」

そういうてシャルルはクローゼットの方に歩いて行く

蒼也「違う、こいつがだシャルル」

シャルル「えつ？」

俺はシャルルの手を掴み、強引にシャルルのベッドに寝かせた

さらに布団をかぶせ、シャルの身体を見えなくさせる

セシリア「あらー夏さん、ビックリしちゃうね。」

一夏「あ、ああ。蒼也に頼まれていたボディーソープを渡しにきた
ついでだ」

セシリ亞「そうでしたか、では夕食も・・・って何をしていきますの、蒼也さん？」

蒼也「シャルルが調子悪いみたいでな・・・・布団をかぶせてた所だ」

シャルル「ん、じまつじまつ・・・・」

セシリ亞「あ、あらそつですの？でしたら蒼也さん、一夏さん。わたくしこれから夕食を取りませんか？わたくしもまだでしたので・・・・」

蒼也「そ、そつか。いいぞ」

一夏「俺もいいぞ」

セシリ亞「ではテュノアさん、お一人をお借りしますわ。お大事に」

シャルル「い、じほつ。いつてらつしゃい・・・・・じほつ」

俺はセシリ亞に腕を取られて廊下に出た

しかも身体を密着させてくる

簫「む・・・・・一夏、こんなところいたのか」

すると廊下から出てすぐ元簫と会った

セシリ亞「あら簫さん。わたくし達、これから3人で一緒に夕食ですの」

簫「なつ・・・・で、では私も一緒に行こう」

セシリア「あらあら篠さん？ 一皿四食は体重を加速させますわよ。」

篠「それなら問題は無い……」れがある…」

篠はビックから取り出したのか鞄に収められている剣を出していった

一夏「篠！？ それ日本刀だぞ！？ なんで此処に持ってきてるんだ！？」

篠「実家から送つてもうひつた。で、では行こうか・・・・・」

篠は一夏の腕を取つて身体をよせていた

一夏「なあ篠・・・・・・」

「なんだ？」

暫く廊下を歩いていると一夏が言いだした

一 延「おれつ」

第二章

一夏「いてつ！？」

一夏の言葉に怒った筈は一夏の腕をつなっていた

蒼也「た、ただいま・・・・・」

シャルル「お、お帰り蒼也・・・・・つてどうづかしたの?」

部屋に戻ると身体を起こしていたシャルルが心配そうに俺を見ていた

蒼也「食堂に行くまでちょっと・・・・・な

セシリアが俺の腕に密着していたため歩くたびに腕に柔らかい感触
が当たっていた

俺だって男だ、なにも感じないわけがない・・・・・

蒼也「うと、食堂からこられ貰つて来たかい。お腹すいてるだろ?」

シャルル「う、うん。ありが・・・・・!」

俺が持つてきたお盆を見たシャルルの顔が一瞬で固まってしまった

蒼也「どうした?」

シャルル「な、何でもないよ……い、頂きます」

お盆には焼き魚定食が乗つていてシャルルはぎこちなく箸を手にことつて食べ始めたが

シャルル「あつ・・・・・」

シャルル「あっ、あっ・・・・・」

ぱりつぱり

何度もやつてもおかげを落としているシャルルに俺は話しかけた

蒼也「箸・・・・苦手なんだな」

シャルル「う、うん・・・・練習はしてこらんだけね」

蒼也「食堂行つてスプーンでも貰つて来る」

俺は廊下に向かおうとするが

シャルル「い、いいよ、そんな。なんとかこれで食べてみるから」

「はあ・・・・・シャルルは他人に甘える事を覚えろ。じゃないと色々損するぞ?」

シャルル「えつ・・・・・」

蒼也「まずは俺や一夏に頼ることから始めてみろ。家庭の事情なんて関係ない俺はシャルルの味方だ。だから、頼つてくれ」

シャルル「蒼也・・・・・」

シャルルは少し考え、纏まつたのか口を開いた

シャルル「じゃ、じゃあ・・・・・蒼也が、食べさせて・・・・・

蒼也「…………え？」

上田づかいでモジモジと言ったシャルルの姿を見た俺は一瞬固まってしまった

シャルル「駄目…………かな？」

蒼也「わ、分かった…………男に一言はないからな」

その後、シャルルが食べたい物を俺が箸で掴んで食べさせ始めた

蒼也 side out

一夏 side

数日後、俺は保健室にいた

理由は・・・・

鈴「別に助けてくれなくてよかつたのに」

セシリ亞「あのまま続けていれば勝つていましたわ」

包帯付けになつているこの2人のお見舞いに来ているからである

2人は数時間前、アリーナで始またラウラ・ボーデヴィッヒとの戦闘でISが解除される程のダメージを負い保健室に運ばれていたのだ

蒼也「だが俺達が介入していなかつたら確実に今以上の怪我を負つてたぞ？」

鈴「そんなわけないでしょ！？」

セシリ亞「そうですわ！！このわたくしがこれ以上無様な醜態をさらすはずがありませんわ！！」

一夏「はいはい・・・」

シャルル「2人とも好きな人に恰好悪いところを見せちゃつたから恥ずかしいんだよ」

一夏「ん？」

シャルルが飲み物を持って戻ってきた

手にはウーロン茶と紅茶が一つづつあった

鈴「なななな何を言つてるのか、全つ然つ分かんないわね！！」

セシリ亞「べべつ、別にわたくしはつ！」

シャルル「はは、とりあえず飲んで落ち着いてね」

2人はシャルルから飲み物を受けつとつた

ドガーン！！

そんな音と同時に保健室のドアが吹き飛んだ

「織斑君！――」

「御剣君！――」

「デュノア君！――」

保健室の中に女子の軍団が雪崩れ込んできた

入ってきたなんて生易しいものでは済まされないほど勢いで

一夏「な、な、なんだなんだ！？」

蒼也「お、落ち着けよ。――」

シャルル「ビ、ビつしたのみんな・・・・・」

「「「これ――」」

状況が飲み込めない俺たちに各自の女子が一枚の紙を差し出してくる

正直軽いホラーである、怖い

俺達はそれぞれ一枚受け取つて書かれている文章に目を通す

蒼也「今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組みでの参加を必須とする。なお、ペアが決まらなかつた者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは

「

「ああ、そこまででいいから……」

そして先ほどと同じように手が伸びてくる

怖ええ・・・・・

「私と組もう、織斑君!」

「私と組んで、御剣君!」

「私と組んで下さー」、デュノア君ー！」

「私と組めばあんなことだつてー！」

「ちょっとー？私の方がいろいろしてあげるよーー。」

最後の2人、一体何を言つてるんだ・・・・。

一夏（まづい）、シャルルが女だつて知つてるのは俺と蒼也だけだ・・・。だとすると俺か蒼也意外と組むとシャルルに負担がかかつてしまつ・・・。よし）

俺は自身の考えを言つ事にした

一夏「わりい、俺は

「

蒼也「すまん、一夏はシャルルと組むつて決まつていの

一夏・シャルル「えつ？」

蒼也から発せられた言葉に声をあげる俺とシャルル

「そつか……なら御剣君……」

「私と組んでよ……」

「私とだよ……」

一夏「お、おい蒼也……」

蒼也「大丈夫だ一夏……シャルルを頼む」

蒼也はそつと歩いて保健室の空いていた窓から外に出ようとする

蒼也「今から1時間の間、学園内を逃げ回る俺を捕まえた奴と組んでやる!!俺はISを使わない、自分の力で全力で逃げてやる!!」

捕まらなかつたら抽選で選ばれるのを願つてくれ！――

そうこつて蒼也は窓から飛び出していった

「行くわよー！御剣君は私の物なんだから……」

「待つて御剣君！いま私が捕まえに行つてあげるから――」

女子の軍団は保健室から颶爽と走り去つていった……

シャルル side

先に部屋に戻つていると暫くして蒼也が戻ってきた

蒼也「ただいま～～～」

シャルル「お、お帰り蒼也・・・・で、どうなったの？」

蒼也「ん？逃げ切つたよ。いくらなんでも、女子に掴まる説が無い
だろ」

シャルル「そ、そつか・・・・・・」

僕は簡単に言つて蒼也の顔を見て安心していた

シャルル「えっと……なんで、蒼也はああ言ったの？」

蒼也「ああ……シャルルには、一夏をサポートしてもらいたかったんだ」

シャルル「サポート……あ」

蒼也「ああ、あいつはボーデヴィッシュさんと戦つ事だけを考えてる。でも、あいつだけじゃ勝てないからな」

シャルル「なら、蒼也が組めば……」

蒼也「それだとシャルルに負担がかかるだろ？他の女子と組むことになるんだから」

シャルル「あつ……」

蒼也「あいつのサポート、頼んだぞシャルル」

シャルル「う、うん・・・・そ、蒼也」

蒼也「なんだ？」

シャルル「えっと・・・・助けてくれて、ありがとう」

蒼也「気にするな、一夏だって俺が言わなくても同じ事を言ってただろうしな」

シャルル「そつか・・・」

蒼也「さて・・・・俺は外に出てる」

蒼也はそつ言つて扉に向かう

シャルル「え？」

蒼也「その・・・・・俺がいると着替えにくいだろ？」「

シャルル「そ、そんな事無いよ！僕は気にしないから」

蒼也「俺が気にするんだよ・・・・・」

蒼也は頭に手を当ててため息を吐く

シャルル「だつてみんなから怪しまれるだらつし・・・・・お互
いに背を向ければ、大丈夫だよ！－」

蒼也「た、確かに…………じゃあ、俺も着替えるか」

シャルル「う、うん…………」

お互に背を向けて着替え始める

シャルル（そ、蒼也…………僕を本当に助けてくれてる…………
こんな僕を…………／＼／＼）

僕は下着に手をかけたがその際に転んでしまう

シャルル「うわっ！？」

蒼也「ビ、ビうした！？…………え？」

シャルル「あ・・・・・・」

蒼也が転んだ僕を見降ろしていた

1

「やがて！」

僕は悲鳴を上げようとして、飲み込んだが蒼也は僕の口を塞ごうと僕に飛びかかっていた

蒼也「さ、騒ぐなシャルル。今騒いだら

L

むにゆ

蒼也「あつ・・・・・」

蒼也は僕の口を左手で塞いでいたが空いていた右手は僕の胸を下着越しに触っていた

蒼也の手を振り払い、僕は蒼也のあごに一撃を入れていた

蒼也はショの一撃で床に沈んでしまった

シャルル「……………」

氣絶した蒼也をベッドに運んで、寝巻に着替えた蒼也の顔をのぞいていた

シャルル「またぐ蒼也は…………見かけによらず強引なんだか
ら…………」

先程の事はシャルルの中では事故でも單なる偶然でも片付ける事が出来ずにいた

シャルル「いや、いやんと言つてくれれば、僕は別に…………」

「――」

そのままで言つて僕は顔を真っ赤にしてしまつ

シャルル（ああもひつ……はやへ寝ひきおひ…）

蒼也から視線をはずし、部屋の照明を落とすが再び蒼也の顔の位置に視線を戻してしまった

暗い部屋の中、それが自分に大胆な事をさせている要因だと気づかず、蒼也の顔を覗き込むシャルル

見つめている距離は5㍍足らずであり、蒼也の寝息が顔にかかる
ていた

それだけでなく、彼の体温まで感じられて、シャルルの胸の高鳴りはいつそう強くなつていた

シャルル「・・・・・・・・・」

その時、蒼也から言われた言葉が頭に蘇えつてくる

蒼也『だつたら此處にいろー。』

初めて、そんな事を言われた

お母さんが亡くなつてから、居場所がなくなつて、血のつながりだけの父親とは氷の壁に閉ざされたような息苦しさしか感じられず、無為に日々を過ごしていた

ついには自分を必要とされる事すら求めなくなつて、そんな灰色な生活に慣れてしまつていた

だから、父に日本に行けと命令されたときも何も感じてはいなかつた

それなのに

シャルル（ギリシャ、蒼也と蒼也の言葉はこんなに僕の心を振り動かすんだわうね）

出合つたしまつた、田の前の少年と

シャルル（好きに・・・・なつやつたんだね。蒼也の事が・・・
・・／＼＼）

自分の気持ちに気づくと、赤かった顔がさらに赤みを増していく

シャルル「おやすみ、蒼也・・・・」

彼の額にキスを落とし、シャルルは自分のベッドに入つて眠りに落ちた

シャルル side out

第8話 救われた心と好意（後書き）

ちなみにこの作品のシャルルには転生の方のフォイドさんのように
なつてもうひとつ予定です。w w

いつ書けるかなあ・・・?

ではでは

第9話 欲望の力（前書き）

ほとんど原作のパロペです

すみません、駄目作者で本当にすみません

第9話 欲望の力

一夏 side

6月の末、ここJWS学園は普段と変わつて学年別トーナメント一色に変わつていた

全生徒が雑務、会場の整理、来賓の誘導を行つていた

そして、終わり次第更衣室に移動し着替える

俺達は3人で広い更衣室を独占しながらモニターを見ていた

一夏「しかし、すごいなこりや・・・」

モニターに映つた観客席から一度は見た事のある人物が多数発見できた

各国政府関係者、研究所員、企業エージェント

シャルルがいうにはそんな人々も来ているらしい

シャルル「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認にそれぞれの人が来ているからね。1年には関係ないみたいだけど、上位入賞者にはチェックが入るのはあると思うよ」

蒼也「ほー、やっぱ物知りだなシャルルは」

先程までエスースに着替えていた蒼也が着替え終わったのか俺とシャルルの側に来ていた

蒼也「ま、一夏はボーテヴィッヒさんとの対戦だけが気になつてゐたいだしな」

シャルル「そうだね」

一夏「まあな・・・・つか、そんなに分かりやすかつたか?」

蒼也・シャルル「ああ(うん)」

一夏「俺なんかより、鈴やセシリ亞達の方が辛いしな・・・」

先日の騒動によって負傷し、トーナメントに出れなくなつた2人の事を考え左手を強く握りしめる

それをみたシャルルがそつとほぐした

シャルル「感情的にならないでね、彼女は現時点で1年最強だと思うから」

一夏「ああ、分かつてる」

蒼也「お、対戦表が決まつたみたいだな」

モニターが変わつて対戦表が映される

一夏・シャルル「え

」「

1年の部、Aブロック一回戦一組目

織斑一夏「1組」&シャルル・デュノア「1組」

VS

リウラ・ボーデヴィッヒ「1組」&篠ノハ筹「1組」

モニターには、それがはつきりと表示されていた

蒼也「はて……布仏本音さんとは、誰の事だ?」

のほとけ
ほんね

蒼也は自分のペア相手について考えていた

「ハカラ」「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたところなのだ」

一夏「そりゃあ何よりだ。ハカラも同じ気持ちだぜ」

アリーナ内で対峙している俺とシャルル、ラウラと篠

そして試合開始まで5秒、4秒、3、2、1

開始！

一夏「おおおおおおおお！」

試合開始と同時に瞬間加速を使ってラウラに接近する

イグニッシュン・ブースト

この一撃が入れば戦況はこっちが優位になるー。

ラウラ「ふん・・・・・・」

対してラウラは冷静に右手を突きだした

来る

その時俺は、実際にラウラと戦った鈴とセシリアの言葉を思い出していた

一夏『AHC?なんだそれ?』

鈴『ラウラが使ってるシュヴァルツェア・レーゲンの第三世代型兵器よ。アクティブ・イナーシャル・キャンセラー、慣性停止能力。

だからAIC

一夏『ふーん』

セシリ亞『零落白夜なら斬り落とせるかも知れませんが、その前に一夏さんの腕本体を止められるでしょうし・・・・』

一夏『ならどうすんだ?』

鈴『それを考えるのがあなたの役目でしょうが』

『もととじ』・・・・『』夏一

結局、AICを確実に対処する方法は見つからなかつた

だから後は

意外性で、攻める！

一 夏 「くつ・・・・・」

けれど、その程度は読んでいたのだろう。俺の身体は見えない腕に
掴まれたかのように、身動きが取れなくなっていた

ラウラ「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

一 夏 「そりゃどうも・・・・・・以心伝心で何よりだ」

ラウラ「ふつ」

敵I-Sにロックオンされています。警告

慌てんなよ、これは1対1の試合じゃないんだから
な?

シャルル「させないよー。」

シャルルが俺の頭を飛び越え、同時に六一口径アサルトカノン「ガルム」による爆破弾の射撃を浴びせる

「ウラ、ちつ・・・・・！」

射撃によつてずいぶんされた砲弾は空を切り、そのまま「ウラ」は急後退して間合いを取る

シャルル「逃がさない！」

シャルルは即座に飛びだし、銃身を正面に突き出して左手にアサルトライフルを呼びだす

それはわずか1秒もからずに形成を終了していた

シャルルが持つ得意技能「高速切替」、戦闘と平行して呼び出せる、
シャルルの器用さと判断力があつてこそ光る代物だ

第「私を忘れては困る」

しかし、ラウラへの追撃を打鉄うちがねを纏つた簫が防ぐ

打鉄の特性といえる実態シールドがそれを現していた

シャルル「くつ」

一夏「シャルル！」

シャルルに斬りかかった簫を真横にした雪片一型で受け止め、シャルルはその一瞬の間にまた武装をえていた

第「なつ！？」

俺の両脇から伸びたその手には六一口径連装ショットガン「レイン・オブ・サターデイ」が握られていた

それを見た簞の顔が青ざめる

この至近距離なら、外さない

ラウラ「邪魔だ

」

簞「なつー・つわつー?」

簞の身体が宙を舞い、入れ替わりにラウラが急接近してくる

簞はラウラの武装のワイヤーブレードの一つに足を掴まれ、飛ばされたみたいだ

簞「くそつー何をする・・・!?

体勢を直した筈が此方に向かおうとするがそれをシャルルが阻む

シャルル「相手が一夏じゃなくて」めんね

筈「なつ・・・・馬鹿にするなー」

俺が雪片一型で4本のワイヤーブレードを防いでいる間、シャルルと筈の戦いが始まった

蒼也「あー・・・・・布仏さんは何処にいるんだ?」

その頃蒼せむ顔と右前が一致していないペアを探しまわっていた

? 「もしもーしーん! ？」

蒼也「ん~のせせんわん~」

後ろから声をかけられ、振り向くとクラスマートのせせんわん「一夏命名」が立っていた

のせせんわん「やつとみつけたよ~、やーーー」

蒼也「それは俺のあだ名か・・・?」

のせせんわんが一夏をおつむーと呼ぶよりは俺の呼び名みたいだ

のほほんさん「や、はやく作戦を始めよー」

蒼也「いや・・・・俺は布仏本音をペアなんだが・・・・」

のほほんさん「だから、私とだから書つてるんだよー」

蒼也「・・・・は?」

のほほんさん「むへ、私が布仏本音だよー。」

蒼也「・・・・すまん、本名知らなかつた」

のほほんさん「あー! 酷い~~~~! -」

アリーナの廊下の一角でそのやり取りが行われていたとか・・・・・

ラウラ「止めだ」

ラウラのワイヤーブレードを避けていた俺の目に映ったのは大型レールカノンの照準を終えたラウラの姿だった

一夏「くそつ・・・・・！」

回避が間に合わないと踏んだ俺は右手の雪片一型で斬りついかる

ギュウ・・・・

一夏「なつー?」

残っていたワイヤーブレードの一一本が右手に絡みついてすぐにてレそうでない状態だった

一夏くわい・・・

シャルル「お待たせ一夏ー!」

シャルルが持つ盾が砲弾を防ぎ、その間にワイヤーを切断してその場から離脱する

一夏「助かつたぜシャルル、籌は？」

シャルル「お休み中」

シャルルが向けた視線の先を見るとシールドエネルギーが0になつた筹が悔しそうに膝まづいていた

一夏「流石だな」

シャルル「ありがと」

これで2対1、ここからが本番だ！

そして俺は、俺の切り札を発動した

零落白夜、機動

一夏「これで決める！」

零落白夜を起動した俺は、ラウラへと直進する

ラウラ「触れば一撃でシールドエネルギーを消滅させると聞いた
が……当たらなければいいだけだ！！」

直後AICによる拘束が連続で襲いかかるが、急停止・転身・急加速でギリギリかわし続ける

ラウラ「ちゅろちゅろと田障りな…………！」

さらにワイヤーブレードも攻撃に加わり、その攻勢が熾烈を極める

だけど、俺は1人で戦っている訳じゃないんだよ！

シャルル「一夏！前方2時の方に向に突破！」

一夏「分かった！！」

ワイヤーブレードをくぐり抜け、ラウラを射程圏内に入れる

ラウラ「無駄だ、貴様の動きは全て読めている」

一夏「普通に斬りかかれば、な。それなら
「

ラウラ「なにつ！？」

足元に向けていた雪片二型の切つ先を起こし、前へと持つてくる

そう、斬撃が読まれるのであれば突撃で攻めればいい

ラウラ「無駄な事を・・・・！」

その瞬間、俺の身体がA.I.Cによって完全に停止する

ラウラ「貴様のその腕にこだわる必要はない、ようは身体を止めればいいのだから」

一夏「……ああ、忘れたのか？俺達は
てるんだぜ？」

2人で戦つ

「ラウラ！」？

ラウラが慌てて視線を動かすが遅い、零距離まで接近していたシャルルが素早くショットガンの6連射を喰らわせていた

「ラウラ」「へっ…………！」

一夏（思つた通りだ。A.I.Cは「停止させる対象物に意識を集中させてないと効果を維持できない」）

俺が考えている通り、俺の拘束は外れていた

シャルル「一夏…！」

一夏「おう…！」

雪片一型を再度構えなおし、ラウラに斬りかかる

しかし

シールドエネルギー、残量低下。零落白夜、維持不可能

一夏「なつ…・・・！」

限界まで減ったシールドエネルギーの影響で零落白夜の展開が出来なくなつた

ラウラ「ふつ、限界までシールドエネルギーを消耗してはもう戦えまい！後一撃でもいれれば私の勝ちだ！！」

シャルル「やらせないよーー！」

シャルルが俺も助けようと援護するが

ラウラ「邪魔だ！！」

ワイヤーブレードによつてシャルルが飛ばされる

一夏「シャルル！…がはつ！？」

飛ばされたシャルルを見た隙を突かれ、ラウラの攻撃をもろに喰ら
い、床に沈む

「ラウラ、はははっ！私の勝ちだ！……」

自分の勝利を宣言するラウラ

しかし

シャルル「まだ・・・・・・終わってないよ……」

「ラウラ、なににつー？」

シャルルが一瞬でラウラに接近し、それをみたラウラの表情が狼狽
を見せる

ラウラ「い、
イグニッショーン・ブースト
瞬間加速・・・・・？」

シャルル「驚いたでしょ、今初めて使ったからね！！」

ラウラ「まさか……この戦いで覚えたと叫ぶのか！？」

事前にみたデータに乗つていなかつた事に驚くラウラ

だがすぐに冷静さをとりもどす

ラウラ「だが……わたしの停止結界の前には無力！」

右腕を突きだし、A I C の発動体勢に入つたラウラ

ドンッ！！

ラウラ「なつ！？」

あらぬ方向から攻撃を受け、視線を巡らせる

そして、シャルルの捨てたアサルトライフルを構えた俺の姿を見つけた

ラウラ「この・・・・死に損ないがああああ！――！」

吼えるラウラだがそれほど冷静を失つてはおらず、目の前にいたシャルルにAICを集中させる

シャルル「これで、間合いには入れた」

ラウラ「それがどうした！――第一世代の攻撃力では、kのシユヴァルツェア・レーゲンを落とす事など

「

シャルル「うん、これさえなればね・・・・・・」

シャルルは「」が隠していた第一世代最強の武器を取り出していた
ずっと持っていた盾の中から

シャルル「この距離なら、外さない！－」

ラウラ「盾殺し（シールド・ピアース）···！」

ズガーン！－！

ラウラ「があつ！－？」

アリーナの壁まで吹き飛ばされ、追撃を行ったシャルルが3発ラウラに打ちこんだ

その攻撃でラウラの機体に紫電が走り、IISの強制解除の兆しが見え始める

そして、異変は起きた

ラウラ（こんな・・・・こんな所で負けるのか、私は・・・・！）

相手の力量を見誤った。それは確かに間違いようのないミスだ、しかしそれでも

ラウラ（私は負けられない！負けるわけには、いかない・・・・・！）

かつて捨てられた私を救ってくれた教官のようになる為にも・・・
・そして、その教官をあんなりに変える存在にも・・・・・私
は、負けられない！！

ラウラ（力が・・・・・欲しい！）

ドクンッ・・・・・

『願うか・・・・？汝、自らの変革を望むか・・・・？』
より強い力を欲するか・・・・？』

言つまでもない。力があるのなら、それを得られるのなら、私など
空っぽな私など、何から今までくれてやる！－！

だから、力を・・・・・比類無き最強を、唯一無二の絶対を
私によこせ－！

Damage Level D .
Mind Condition Uplift .
Certification Clear .

『Valkyrie Trace System』 boo

t .

蒼也「…………！」
俺は突然感じた違和感に反応し、座っていた椅子から立ちあがつた

本音「セ～ヘ～～ビツしたの～？」

俺達は更衣室で作戦を練つてゐる途中だった

俺はそのまま更衣室から飛び出して一夏ヒシャルル側のピットに向かい始めた

蒼也（なんだ・・・・・）の胸のざわめきは？あいつひし・・・
なにか起きたのか！？）

俺は全力でピットを目指した

第10話 解き放たれる黒兎

一夏 Side

一夏・シャルル「！？」

突然ラウラが身が裂かんばかりの絶叫を発し、それと同時にシユヴ
アルツエア・レーゲンから激しい電撃が放たれ、傍にいたシャルル
が吹き飛ばされる

シャルル「あぐつ・・・・・一体、何が
！」

一夏「なつ！？」

俺とシャルルは田の前の状況に驚いていた

なぜなら、シユヴァルツェア・レーゲンの装甲がぐしゃりと溶けラウラを飲み込んでいたからだ

一 夏「なんだよ・・・・・あれ」

ISは厳密に言えば変形をしない、いや出来ないと言つた方が正しいISが形状を変える方法は「スタートアップ・フィッティング初期操縦者適応」と「フォーム・シフト形態移行」の2つなのだ

つまり、今日の前で起きている現象はありえないものである

シャルル「一夏、これは・・・・・」

一 夏「分からない・・・・・」

シャルルと話している間にもそれは形を変形させていく

そして、黒い全身装甲の「EIS」の形に留まって変形を終了した

その手に、一つの武器を持つて

「夏」「雪片」「…………」

千冬姉がかつて振るつた刀、それがその手に収まっていた

酷似……いや、まるで複写トランクスしたかのようなレベルであった

俺は無意識のうちに「雪片」一型を握りしめていた

黒EIS「…………」

刹那、黒いEISが俺の懷に飛び込んでくる

俺はとっさに「雪片」一型を構える

ガキンッ！

一 夏「……」

雪片一型が弾かれ、黒いEISはそのまま上段の構えに入る

一 夏（これは
まずい！？）

俺は白弧に「後方退避」の緊急回避命令を送る

そして、黒いEISの斬撃が襲いかかった

ガキイイイイインッ！！！

蒼也「…………」

割り込んできた蒼也が俺に斬撃が当たる直前、ビームサーべルを開して刀を止めていた

蒼也「つ・・・・・一夏、大丈夫か！？」

一夏「あ、ああ。大丈夫だ」

蒼也「そ・・・・うかつ！！」

黒IIS「…」

蒼也がサーベルを振り払い、黒いIISは一端距離を取る

シャルル「そ、蒼也！？どうして此処に！？」

蒼也「いやな胸騒ぎがしてな・・・・・急いで来てみればこんな事になつてたんだ」

第「一夏ー！」

そこに打鉄装備の簫が来る

一夏「蒼也・・・・・あいつは、俺が止める

蒼也・簫「なつ・・・・・一夏ー！？」

そして俺は雪片一型を構えて黒TISに突っ込んだ

一夏 side out

蒼也 side

一 夏が黒いHSに飛び込んでいく

第「馬鹿者！…白式のエネルギーがほぼ無い状態で…下が
れ、一夏！」

しかし、第の言葉に耳を傾けず一夏は黒いHSと斬り合い始める

蒼也「くつ…俺が一夏を止めるー！」

シャルル「待つて蒼也…」こんな事態、学園の先生方がすぐに収集しててくれるよ！」

非常事態発令！トーナメント全試合は中止！状況をレベルロと認定、鎮圧の為教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難する事！繰り返す

蒼也「それでも・・・・・せめて一夏を止めるー」のままだといつ白刃が解除されるか分からぬ！

シャルル「あ、蒼也ー！」

シャルルの言葉を振りきつて、俺は斬り合っている一夏の元に飛んだ

黒HIS「ー」

すると、黒いHISは標的を俺に変更して雪片で斬りかかってくる

一夏「無視するなあああああー！ー！」

その隙に一夏が雪片一型で斬りかかる

黒IIS「！」

一夏「がはつ！？」

蒼也「一夏！？」

一夏が反応出来ずに、回し蹴りを喰らい篠達のすぐ側に落とされる

それが最後だったのか、白式が解除されIISスーシの姿に戻る一夏

黒IIS「！」

蒼也「ちこつ！？」

クスイファースを放ち、一端距離を開かせる

蒼也（先生方が来るまで・・・・・持たせてみせる！）

蒼也 side out

一夏 side

一夏「それが・・・・・ビリしたああああーー！」

白式が解除されてなお、一夏は黒いHSに殴りかかるひとり

それを、簾がHSから降りた状態で後ろから羽交い絞めにして止める

一夏「離せよ簾……あいつは

「

簾「いい加減にしろ……」

バシーン！

簾が一夏の類を思いつきひつぱたく

それで少し冷静になつたのか、息を整える一夏

簾「説明しり！なんだというのだ……！」

一夏「あこつ、あれは千冬姉のトータだ。千冬姉だけのものなんだ
よーーー！」

篠「…………まつたく、お前は」

一夏の言葉を聞いて、ため息を吐く篠

一夏「それだけじゃねえよ、あんな、わけわからんねえ力に振り回されているラウラも気にいらねえ。エリとラウラ、どちらも一発いれねえと気が済まねえ」

篠「理由は分かつたが、どうするところのだ？・白式のエネルギーは無いに等しいんだぞ？」

一夏「ああ…………」

篠「それに、蒼也が時間を稼いでくれてこる。その間に学園の先生方が鎮圧してくれる。お前がやる必要は無い

一夏「ちがうぜ、篠。これは俺がやらなきゃいけないんじゃない…
・・・・」俺がやりたいからやる」んだよ

篠「しかし…・・・・」

シャルル「エネルギーがないなら、他から持つてくれればいいんだよ」

一夏「シャルル…・・・・」

今まで黙っていたシャルルが、会話に入り込んできた

シャルル「僕のリヴァイブなら、コア・バイパスでエネルギーを移
せるよ」

一夏「本当か！？」

シャルル「ただし、約束して。絶対に負けないって」

一夏「ああ、負けたら男じゃねえよ」

シャルル「じゃあ、負けたら一夏には明日から女子の制服で通つて
もらおうか」

一夏「うつ・・・・いいぜ？負けないからな」

シャルル「ふふつ」

シャルルのがリヴィア・イブから伸ばしたケーブルを籠手状態の白式に
繋ぐ

シャルル「リヴィア・イブのコア・バイパスを解放、エネルギーの流失

を許可

」

数秒間、その状態が続くとシャルルの装甲が光に包まれ消えた

シャルル「これで大丈夫。リヴァイブのエネルギーを全部白式に渡したよ」

IS-スースのシャルルが俺を見て言つ

その視線はすぐに戦闘中の蒼也に向けられる

シャルル「蒼也……」

一夏「…………白式を一極限定状態で再起動する

俺の言葉に反応して、白式が右手の雪丘一型と装甲だけで展開する

竇「一夏……死ぬな、絶対に死ぬな！！」

一夏「信じろよ」

竇「あつ・・・・・」

俺の言葉に、言葉をとじめる竇

一夏「俺を信じろよ、竇。ただ、信じて待って入れくれればいい。
必ず、勝つて帰つてくれる」

そして俺は、雪片一型を両手で構え

一夏「零落白夜

発動！」

俺の切り札を、発動した

それは今までとは違った

今までのように、強大なエネルギーを開放するだけだった零落白夜の刃ではなく、細かく鋭い刃となっていた

一夏 side out

黒いISと斬り合い続けていた蒼也だったが、時間が経つにつれ、不思議と相手の斬撃を全て受け流せるようになっていた

蒼也 side

蒼也（なんだ・・・・・？見える、）いつの・・・・・剣の動きが）

斬撃が振り下ろされても、最小限の回避でよけ、確実に攻撃をいれていく蒼也

蒼也（分かる……………）に一つの動きが、隙が……………）

蒼也は気づいていなかつた、フリーダムの展開している画面に表示されてゐる言葉に

唯一使用の特殊才能、**SEEDED**発動
ワンオフ アビリティー

一夏「蒼也、後は俺がやる

蒼也「…………分かつた

俺はサーべルを閉まって、黒いエスから離れる

一 夏「…………」

零落白夜を発動した一夏に黒いエスが反応する

そして、一夏に斬撃を振るつた

一 夏「はあああ！－！」

それを避けた一夏が、上から雪片一型を一閃し、黒いエスを斬った

斬られた部分からボーデヴィッシュさんが出てきて、一夏が受け止める

蒼也「やつたな、…………夏…………」

それを見た俺は、地面に足をつけて意識を手放した

蒼也 side out

千冬「気がついたか

田を覚ますと、教官の姿が映つた

ラウラ「此處は・・・・私は」

千冬「全身に無理な負担がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。
暫くは動けないだろ?」

ラウラ「何が・・・・・起きたのですか?」

私は状況を把握するために、教官に問う

千冬「一応、重要案件であるついでに機密事項なのだが・・・・・・

・・

教官はしばし沈黙して、言葉を紡ぎ始めた

千冬「∨-システムは知っているな？」

ラウラ「ヴァルキリー…………トレースシステム？」

千冬「そうだ、HIS条約によつて全ての国家・組織・企業においても研究・開発・使用全てが禁止されている…………それが、お前のISに積まれていた」

ラウラ「…………」

千冬「操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして操縦者の意思…………いや、願望か。それらが揃うと、発動するようになつていた」

ラウラ「私が…………望んだからですね」

沈黙が流れ、ラウラは言葉が出なくなってしまつ

千冬「ラウラ・ボーデヴィッヒ」

「ラウラ」「は、はー」

千冬「お前は、誰だ？」

ラウラ「わ、私は・・・・」

自分がラウラだと叫んでしても、言葉が出でこない

千冬「誰でもないなら、これからラウラ・ボーデヴィッヒになればいい。3年間はこの学園に在籍するのだからな」

「ワラ」「あ……」

話す事が終わったのか、座っていた椅子から立ち上がる千冬

千冬「ああ、それから…………お前は私になれないぞ」

「ワラ」「えつ…………」

自分があの時、本当に望んでいた事を覗透かされている事に驚くワラ

千冬「あいつの姉は、いつ見えて心労が絶えないのさ」

そう言って部屋から千冬が立ち去ると、ワラは笑いだした

「ウラ、ふ、ふふ・・・・・はは」

「ウラは血虫が一夏に助けられた時の出来」とを思ってい

千冬「一つ忠告しておぐれ。あこつに呑う事があれば、心は強く持て。あれは未熟者のくせにどうしてか、妙に女を刺激する。油断していると、惚れてしまつやつ。」

そんな風に言つ教官の顔は、酷く嬉しそうだった

それに何処かモヤモヤしていく

「ウラ、『教室も惚れているのですか?』

千冬「姉が弟に惚れるものか、馬鹿め」

ニヤリとした顔で言われて、ますます落ち着かなくなる

これは私の記憶、そして・・・・・その後が私にとって、出会った

一夏『強さつづーのは心の在処。自分がどうありたいかを常に想つ
事じやないか、と俺は想つ』

・・・そつ、なのか?

一夏『やりたいようにせんぬきや、いふこと人生で揃をするがへ』

ではお前は・・・・?お前は何故強い?

一夏『強くねえよ俺は、全く強くない・・・』

その言葉に私はポカンとしてしまつ

一夏『けれど、もし俺が強いつもりのなら、それは
強いのぞ』

心が、

一夏『それに、強くなつたら、やつてみたい事があるんだよ』

やつてみたい事・・・・?

一夏『誰かを守つてみたい。自分の総てを使って、ただ誰かの為に戦つてみたい』

それは、まるで・・・・・あの人によつだ

一夏『そうだな。だから、お前も守つてやるよ。ラウラ・ボーデヴィイッヒ』

そう言われて、私は気づいた

ここでの前では、私はただの15歳なのだと。ただの「女」なのだと

織斑、一夏

彼の言葉に、私はときめいてしまった

ああ、これは確かに

惚れてしまいそうだ

ラウラ side out

第11話 本当の名前

一夏 side

『トーナメントは事故により中止になりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての1回戦は行います。場所と日時の変更は』

食堂のテレビを誰かが消し、俺は食べていた海鮮塩ラーメンをまた食べ始めた

ちなみに、シャルルと同じテーブルで食べている

一夏「シャルルの予想通りだな」

シャルル「そうだね。あ、一夏。七味取つて」

一夏「はいよ」

俺は俺の近くに置いてあつた七味をシャルルに手渡す

シャルル「ありがと」

当事者な俺達がこんな呑氣で夕飯を食べても良いのかって?

勘弁してくれ、それまで教師陣から事情徴収を受けていたんだから

おかげで食堂終了ギリギリに到着し、今しきして食べているわけだ

一夏「蒼也は平氣なのか?」

俺が零落白夜での黒いE.Sを斬つてラウラを助けたと同時に、それまで交戦していた蒼也がE.Sを解除して倒れたのだ

シャルル「うん、ただの疲労らしこよ。今は部屋で寝てるだらうし・

・・・・・

「やつらのシャカルの顔は何処か安心してこよんだった

一 夏 「やつか・・・・・・・・」

俺は食器を上げたり下ろしたりして席から立つ

一 夏 「ん・・・・・?」

そこまで今か今かと心待ちにしていたはずなのに今は酷く落胆してこのようだつた

さつきまで今か今かと心待ちにしていたはずの女子達が田に映つた

「・・・・・優勝・・・・・チャンス・・・・・消え・・・・・」

「交際・・・・・無効・・・・・」

「・・・・・わあああああああんつ！－！」

そこに立っていた女子達数十人はバタバタと泣きながら走り去つて
いった

シャルル「どうしたんだろ？・・・・？」

シャルルも食べ終えたのか、食器を持つて俺の横に立つていた

一夏「さあ・・・・・ん、筈？」

女子達が走り去った後に、呆然と立ちつくしている筈の姿があった

俺は食器を置いてから話しかける

一 夏「筈、そつとんくわば先月の約束だけど……………」

筈「あ、ああ
」

一 夏「付き合いつても、いいだ？」

筈「ほ、本当に…? 本当に、本当に、本当にのだなー?」

一 夏「何回確認すればいいんだよ……………

一 夏「あ、ああ」

筈「な、何故だ!?!、理由を聞いひではないか……………」

一 夏「幼馴染の頼みだから。付き合いつた」

筈「そ、 そつか・・・・・」

そう聞いた筈の顔は何処か嬉しそうだった

一 夏「買い物くらい」

筈「・・・・・・・・・」

そして、一瞬で表情がこわばる

どうしたんだ?

筈「・・・・・だらり・・・・・」

一 夏「?」

幕「そんな事だらうと思つたわつ……。」

「どうしり……！」

一夏「ぐはあつ……？」

幕の正拳つを喰らつて、床に沈む俺

シャルル「一夏つて、わざとやつてるんじやないかつて思ひ時があるよな」「ね」

一夏「ど、どうこつ意味だ……それは？」

シャルル「ああね？僕は蒼也の分を持つていかないといけないから、また明日」

シャルルはそう言って、前もって頼んでいた蒼也の夕食をトレイに乗せて部屋に戻つていった

一夏 side out

蒼也 side

蒼也「ん・・・・・此處は、俺の部屋・・・・か?」

気が付くと、俺は自分のベッドの上にいた
どうやら、誰かが運んでくれたらしい

蒼也「…………」

俺は、あの時感じていた感覚を思い出そうとした

あの、敵の動き、隙が何もかも見えている

あの時の感覚を

シャルル「あ、蒼也？ 田が覚めたんだ」

蒼也「シャルル…………」

シャルルがトレイに食事を持つて部屋に入ってきた

シャルル「はい、蒼也の夕食。持つて来たよ」

蒼也「あ、ああ。ありがとな」

俺はベッドから立つて、テーブルに置かれた夕食を食べ始める

シャルル「・・・・・・・・」

その間、何故かシャルルが俺をじっと見つめていた

何故かは分からぬが・・・・・・

真耶「御剣君？デュノア君？ちょっとといいでですかー？」

シャルル「あ、はい」

外から山田先生の声が聞こえ、部屋に入つていいとシャルルが答える

真耶「えつとですねー。ついに今日から、大浴場が使用出来る事になつたんです!!」

蒼也「え? そうなんですか?」

真耶「はい! えつと、御剣君はお食事中みたいですし、デュノア君と織斑君は先に入つてきただろですか?」

シャルル「え、えつと・・・・・・」

シャルルが困ったように俺を見る

そうだよな、シャルルは実は女だし・・・・・

シャルル「えつと・・・・・僕は蒼也と一緒に行くので、先に一夏に行つていてと伝えてくれませんか?」

真耶「ですか？なら、伝えておきますね」

そう言って部屋から出て行き、隣の一夏に伝えに行つた山田先生であった

シャルル「えっと・・・・行かないと、不味いよね?」

蒼也「ああ・・・・・・」

風呂場に行くまでに打開策が浮かび上がる

そんな淡い希望を抱く俺であつた・・・・・・・

幾分テンションが高い山田先生に見送られて、脱衣場に入る俺とシ

真耶「いやあくつ～」

結局、何も浮かばずに風呂場に来てしまった

蒼也「ど、どうも……」

真耶「あ、来ましたね！それじゃあどうぞ！」

ヤルル

蒼也・シャルル「……………」

周りを見る限り、既に一夏は部屋に戻ったようである

男物の衣類が何処にも置いてない為、そう判断出来た

蒼也「えーと、シャルル？」

シャルル「は、はいっ！？」

敬語で反応するシャルル、まあ…………こんな状況だしなあ……

・

蒼也「シャルルは今日疲れただろうし……風呂入つてこいよ。
俺は適当に時間つぶして、部屋に戻つてシャワー浴びるからや」

シャルル「え・・・でも、蒼也は時間稼ぎした時の疲労も残つて
るよ?僕の事は気にしないでいいから、ね?」

蒼也「そ、そうだが・・・・・」

シャルル「それに・・・一夏が言つてたけど、日本の男子つてお風呂に入る方が好きなんだよね？」

蒼也「まあ、好きと言われれば好きだが・・・・・いいのか?」

シャルル「うん」

蒼也「じゃあ、入るか・・・・・・」の恩は、いつか返すよ

シャルルは顔を赤くして答へ、俺はシャルルの視界に入らない所で服を脱いだ

蒼也「じゃ、じゃあ入つてくれる」

シャルル「う、うん。ごゆっくり」

そして、扉を開けて大浴場に入る

蒼也「…………広っ！？」

あまりの広さに大声で叫ぶ

俺の声が風呂に響く

蒼也「とにかく、身体を洗うか…………」

そして俺は全身を洗い終えて湯船に浸かった

蒼也「あ～…………久しづびの風呂だ～…………」

何とも言えない、この感覺

やはり日本人は風呂でないと駄目みたいだ

蒼也（やべえ…………氣持ち良すぎて眠りそうだ…………）

カラカラカラカラ・・・・・

蒼也（ん？氣のせいか…………今、脱衣所の扉が开くような音
がしたんだが・・・・・）

ぴたぴたぴた

濡れたタイルの上を足が歩く音が聞こえる

蒼也（なんだ・・・・・まあ、いいや・・・・・）

そんな音も今の蒼也には自然の音にしか聞こえていなかつた

しかし

シャルル「あ、お邪魔します・・・・・//」

蒼也「ああ・・・・・どうどうどう・・・・・・・! ?」

半ば湯船に沈みかけていた顔を飛び上がらせると、湯気の向こうにはスポーツタオルを身体に当てていたシャルルの姿があつた

しかし、シャルルの肌はタオルが濡れているため、うつすらと透け

て見えていた

蒼也「なつ・・・・・」

シャルル「・・・あんまり、見ないで。蒼也のえっち・・・・・」
「/ / / / /」

蒼也「す、すまん！！」

少なからず、タオル越しとはいえた身体を見てしまったため即座に謝る蒼也

蒼也「ど、どうした？確かに俺は入浴を勧めたが、それは俺が入らない場合であつてだな・・・・」

シャルル「僕が、一緒だと・・・・・イヤ・・・・・？」

蒼也「いや、けしてそういう訳ではないが…………」

俺も健全な男子高校生、普通の15歳だ

IISが動かせようと、そこは変わらない

つまり、人並みに異性には興味がある

だからこそ、この状況に困っている

シャルル「えっと、ね…………やつぱり、お風呂に入つてみようかなと思つて……め、迷惑なら上がるよ?」

シャルル「い、いやいや。上がるなら俺が上がる。シャルルはゆっくり堪能すればいい……」

シャルル「ま、待つて!」

シャルルの声に呼び止められ、動作を止める

シャルル「そ、その・・・・・話が、あるんだ。大事な事だから、蒼也にも、聞いてほしい・・・・・」

蒼也「わ、分かつた・・・・・」

大事な事と言われば、聞かないわけにもいかない

俺は、シャルルの味方なんだから

シャルル「その・・・・・前にも行つた事、なんだけど

蒼也「・・・・・学園に、残るつて話か？」

シャルル「う、うん。僕ね・・・・・此処にいようと思う。僕はまだ、此処だつて思える居場所を見つけられてないし、それに・・・・・」

蒼也「そ、それに・・・・・？」

俺の背中に背を預けるようにシャルルが動き、そのまま沈黙が続く

ぴ
ち
や
ん

シャルル「ややあつ！？」

蒼也「どうした!?」

シャルルの可愛らしい叫び声に、驚く俺

シャルル「す、水滴が落ちてきて……ビックリしただけ」

蒼也「そ、そうか……」

シャルル「…………」

蒼也「…………」

そして、また沈黙が流れる

ちやふ・・・・・

蒼也「シャルル？」

湯船の水が動く音が聞こえ、俺は反射的に発生源の方へ顔を動かそ
うとする

シャルル「こ、こっち見ちゃ駄目……あっち向いてて！！／＼」

蒼也「す、すまん！／＼」

僅かだがシャルルの身体が見えてしまい、すぐに言われた通り視線を元に戻す

蒼也（な、何がしたいんだシャルルは！？俺は男だぞ！？駄目だ…・・・頭がくらくらしてきた・・・・・）

しかし、そんなぼーっとした意識は次の瞬間、吹き飛んだ

シャルルの手が俺の背中に触れる

ひとつ

蒼也「シャ、シャル

」

そのまま、手は俺を抱きしめた

シャルルの華奢な身体が俺の背中に密着して、俺の鼓動は今までにない位バクバク言い始める

シャルル「蒼也が、此処にいろいろ言つてくれたから。そんな蒼也がいるから、僕は此処にいたいと思えるんだよ」

蒼也「そ、そうか・・・・・」

俺は、自分に何かできないと思つて言つたことだったが、それがシャルルの助けになつたのなら、嬉しいと思つ

シャルル「それに、ね。もう一つ決めたんだ」

蒼也「もう一つ・・・・・？」

シャルル「そう。僕のあり方。蒼也が教えてくれたんだよ？」

蒼也「そ、そ、うか・・・・・」

シャルル「うん、それでね・・・・・。僕の事は、2人つきりの時は
シャルロットって呼んでくれる？」

蒼也「シャルロット・・・・・それが」

シャルル「うん、お母さんがくれた、僕の本当の名前

蒼也「分かった シャルロット」

シャルロット「ん」

嬉しそうにシャルル　　いや、シャルロットが返事をした

蒼也「と、ところだな・・・・・い、こつまでもこの状態でいら
れると、正直色々とまずい事態が起こりうるんだが・・・・・」
「」

今俺の背中ににはシャルロットの柔らかな膨らみが密着している

せひ、直に胸が当たっているのだ

シャルロット「あ、ああっ、うんっー。ほ、僕、先に身体と髪洗っちゃうねー。」

シャルロットが自覚して、湯船から上がる

シャルロット「いや、どうぞ覗いちや駄目だよ……？」

蒼也「あ、ああ……分かつて」

シャルロット「…………覗いても、いいのに……」

最後に何か呟いていたが、俺には聞こえなかつた

その後、お互に別々に着替え終えて、部屋に戻つた

次の日、朝のHRが始まる前

俺は一夏と一緒に教室に来た

シャルロットは『先に行って』と言わされたからである

真耶「お、おはよう・・・・・」
「すみません」

山田先生がぐつたりした表情で教室に入ってきた

な、何があつたんだ！？

真耶「今日はですね・・・・・みなさんには転校生を紹介します。あ、
でも・・・・・みなさん既にしつてているというか・・・・・既に紹介は
済んでいるというか・・・・・」

山田先生の説明にクラス全員？マークを浮かべている

真耶「じゃあ、入つて下さい」

「失礼します」

・・・・・今の、声・・・・・まさか

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めて宜しくお願ひします」

シャルロットが女子の制服を着て、丁寧にお辞儀をしていた

「え？ デュノア君って女・・・・？」

「つて、御剣君、同室だから知らないってことは」

「ちょっと待つて！ 昨日つて確か、男子が大浴場を使つたつて！」

あー・・・・・死んだかな、これ？

俺がそう思った瞬間、教室のドアが蹴飛ばされた

鈴「一夏ああああああつ……！」

そこに立っていたのは鈴だつた

その背後には、昇竜が見える

鈴「死ね！！！」

ISアーマーが展開し、それと同時に両肩の衝撃砲がフルパワーで撃たれた

鈴「ふーっ、ふーっ、ふーっ...」

怒りのあまり肩で息をしている鈴

それは威嚇している猫のようにも見えた

一夏「・・・・・ラウラー!？」

一夏の前にはショヴァルツェア・レーゲンを纏つたラウラがいた

恐らく、AICで衝撃砲を消したのだろう

一夏「助かつたぜ、サンキュー・・・・・むぐつー?」

一夏の方を向いたラウラに礼を言つた一夏だが、その唇が塞がつた

ラウラの唇によつて

「ウカウカ」お、お前は私の嫁にする……決定事項だ……異論は認めん
……」

一夏「…………はっ！」

鈴「一夏…………死んで詰びりおおおおおおおお…………」

一夏「なあああああああーー？」

再び衝撃砲の標的にされる一夏

逃げようとするが、箭が真剣を持って塞いでいた

セシリア「蒼也さん…………詳しへOHNZASHIKUせてもら
いますわよ？」

セシリア、それはお前が使うものではないと思うんだが……

そのH.Rは、頃合いを見て織斑先生が鎮圧させた

一夏という犠牲を払つて……

蒼也 side out

第1-1話 本当の名前（後書き）

ついにシャルルが女の子だと公表！！

次回からは臨海学校編！！

冒頭には「アレ」がありますよーー！

やひこ・・・・・

ではではー

第1・2話 朝からドキドキ ハプニング？（前書き）

今回は3巻の冒頭です

アニメでは9話の開始5分程までかな？

原作を呼んでいる方なら原作とは違うものがありますのでお楽しみに

ただ、今日は短いです

すみません、ではどうぞ

第1-2話 朝からドキドキ ハプニング？

シャルロット side

シャルロット「じめんね、手伝つてもらつちやつて」

蒼也「気にするな」

放課後の廊下、赤い夕陽が差し込む中を蒼也とシャルロットが歩いていた

2人の手には、数日後の臨海学校についてのプリントがある

シャルロット「でも、良かつたの？今日は一夏達と買い物に行く予定だつたんでしょう？」

僕は自分に付き合つもらつている蒼也に少し申し訳ない気分になる

蒼也「いいんだよ・・・・大体、シャルロットがいなんなら行つてもしようがないしな」

シャルロット「え？」

蒼也「まあ・・・・その、プリントの手伝いでも好きな相手と一緒にいた方が良いってことだよ／＼／＼」

そう言つた蒼也の頬は少し赤みを帯びていた

シャルロット「蒼也・・・・／＼／＼」

蒼也「シャルロット・・・・／＼／＼」

2人しかいない廊下で、お互の瞳には相手だけが映つている

そして、夕日の色に染まっている廊下で、一人の影は徐々に重なつて

シャルロット side out

一夏 side

一夏 「ん・・・・・」

窓から朝日が差し、田を覚まし始める一夏

一 夏 (もつべ) ． ． ． ． ． ． ． ．

このまどかの延長、それが至福の時である

ふ。

一 夏 (． ． ． ． ． ． ？)

ふにふ。

一 夏 (はて、この感触はなんだ？)

すべすべじで、柔らかい感触

それが布団の中につた

ふにふにゅつ。

「ん・・・・・・・・

待てい。今、確かに俺の物ではない声が聞こえたぞ

俺は目を開けて、布団をめくる

一夏「ラ、ラ、ラウラーー?」

そこにはドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒだった

しかも、寝間着なども着ず全裸で俺の真横で寝ているのだ

「ラウラ「ん・・・・・なんだ・・・・?もう朝か・・・・?」

一 夏「ば、馬鹿！隠せ！…」

田を擦りながら身体を起すラウラ

色々と見える為、身体を隠すように促す

ラウラ「夫婦とは包み隠さぬものだと聞いたぞ……」

一 夏「俺は夫婦になつた覚えは無いぞ！？」

ラウラ「日本では、気にいった者の事を「俺の嫁」と言ひらしいが・
・・・」

一 夏「お前に間違つた知識を吹き込んでるのは誰なんだ……？」

俺がラウラに指差しながら手を伸ばすと腕を取られて身動きが取れなくなってしまう

痛えつ！？痛いつて！？

ラウラ「お前はもう少し寝技の訓練をすべきだな。で、どうしても
と言つのなら、私が相手になつてやらなこでもないが……」
「――」

一夏「何故そこで顔を赤くする！？」とか、蒼也が起きるだらうが
！？」

シャルル、いやシャルロットの性別がばれて以来、俺と蒼也は同室
になつた

つまり、窓側のベッドでは蒼也が今もすやすやと寝てこらねばなのだと

ラウラ「安心しろ、私は別に気にしない。お前と蒼也になら身体を見せても問題は無い」

一夏「はあー？」

ラウラ「蒼也も私を助けようとしたのだけれど、お前ほどでもないが、蒼也を気にしているのは確かだ」

一夏「そ、そつか……つて、それでもこれは駄目だろー！？
いいから離せーー！」

ラウラ「なに…………私だけがこんな事しているわけではないぞ
？」

一夏「…………はい？」

ラウラの視線が隣のベッドに向けられていたので、俺もそちらを向く

そのベッドにかかっている布団からは、2人分の足が出ていた

蒼也 s.i.d.e

蒼也（ん・・・・・なにか騒がしいな・・・・・）

半覚醒の頭に一夏と誰かの言ひ合ひが聞こえる

しかし、それを聞いていても蒼也の頭は半覚めようとしていない

蒼也（まあ、いこや・・・・・もつらし、寝よ・・・・・）

蒼也は寝返りをしようとすると

「ん・・・・・」

蒼也(・・・・・・・?)

完全に動かせず、しかも腕によつて抱きしめられているのを感じく

蒼也

蒼也(何だ・・・・・?)

その存在を確かめる為に手を開ける蒼也

シャルロット「すう・・・・・ん・・・・・」

蒼也「……………？」

目に入ったのは可愛い寝顔のシャルロットであった

しかも、顔と顔の间距は5cmあるかないかだった

シャルロット「う…………ん…………や、うやあ…………」

蒼也「う…………／＼」

どこか甘じを感じがする寝言で、しかも自分の名前を呼ばれて恥ずかしくなる蒼也

しかも、シャルロットの両腕が自分の身体を抱きしめている為、柔らかいシャルロットの胸が普通に当たっていた

第「チエストオオオオオオオオ！－－！」

一夏「どうせああああああああー!?

ラウラ「人の嫁に何をする！？」

篇「知らん……」につをまでは成敗する……。」

一夏「や、止めう算ー！」

どうやら、隣の一夏にも何かあったようで、部屋から飛び出て行つたようだ

セシリ亞「蒼也さん？もづ、朝ですわよ？」

コンコンと閉められたドアが叩かれ、冷や汗を流し始める蒼也

・・・・・

シャルロットを隠すために、身体を揺すりはじめる蒼也

シャルロット「…………ん、蒼也…………？」

蒼也「起きろシャルロット、それで少し隠れ

シャルロッテは目を開けると同時に、俺の上に覆いかぶさった

蒼也「シャ、シャルロット？早く隠れないと……」

シャルロット「蒼也」・・・・・・・・

しかし、蒼也の言葉が聞こえていないのか顔を近づけたシャルロット

10cm、5cm、3cm 顔と顔の距離が縮まっていく・・・

セシリ亞「蒼也さん、入りますわよ？そろそろ起きないと、朝食の時間がなくな・・・り・・・」

部屋のドアを開け、中に入ってきたセシリ亞の顔が2人の姿を確認すると同時にこわばつていく

セシリ亞「な、何してこらんのですの・・・・・蒼也さん、シャルロットさん・・・・・？」

蒼也「いや・・・・・これはだな・・・・・」

その間にもシャルロットは顔を近づけてくる

もひつ、10cmあるかないかまで近づいていた

蒼也「ええいー・シャルロット、起きろーー！」

蒼也が頭にチョップしようとしたが、シャルロットの身体は急に離れて、床に落ちる

セシリア「そ・う・や・せ・ん?少し、OHANASHIが必要の
よひすわね・・・・・」

金色の髪が逆立ち、セシリアの後ろにまがまがしいオーラと修羅が
見えてくる蒼也

シャルロット「・・・あれ?蒼也にセシリア?ビビったの?」

よひすへ田を覚ましたのかシャルロットが状況を問う

セシリア「シャルロットさん？あなたも後でO H A N A S H Iです
わよ？」

シャルロット「え？」

その後、寮の一室に男子と女子の悲鳴が一つづつ響いたとか・・・

蒼也 side out

第1-3話 愛称、それは関係進展のフラグ？

蒼也 side

一夏「あ～・・・朝から酷い日にあつた・・・」

蒼也「俺もだ・・・」

現在、モノレールに乗つて目的地の駅前近くのショッピングモールに向かつている俺達

ちなみに、メンバーは

篠「ふん、大体貴様が朝からあんな事をしていいからだ！」

一夏「だから篠！！あれはラウラが勝手に」

篠「うるさいこいつ！男ともあらうものがいいわけするなーー！」

怒り心頭で外を眺めるように顔をそむける筈

シャルロット「えへへ～／＼／＼

「あはは」

一夏と篠が座っている席の前では、シャルロットが俺の腕に幸せそうに抱きついてにやけていた

「？」
蒼也「シャルロッテがあんな事するからセシリアが怒ったんだぞ！」

シャルロット「うう・・・・・だって」

俺がきつい口調でシャルロットに言つて、なぜかおから一転膨れ

顔になるシャルロット

蒼也「はあ・・・・・大体、なんであんな事を」

シャルロット「・・・・・あ、そうだ蒼也。どうして僕を誘つてくれたの?一夏に籌もいるし・・・」

疑問だつた事を俺に聞いてくるシャルロット

蒼也「ああ。もうすぐ臨海学校だろ?俺も一夏も水着持つて無かつたし、シャルロットも無いつて前に言つてたから一緒にと思つてな」

シャルロット「や、そっか・・・・・」

一夏「筹も持つてないつて言つてたから、つこで呼んだんだよ」

簾「・・・・ふんつ！」

ガツンッ！

一夏「ぐえつー！？」

簾の正拳を喰らい床に沈む一夏

シャルロット「唐変木だね、一夏・・・・」

蒼也「簾も鈴もラウラも浮かばれないな・・・・」

そして、目的地の駅に着いた

シャルロット「～～～」

シャルロットは降りるなり蒼也の手を握った

篠「・・・・・」

篠は俺とシャルロットを見て、次に一夏を見る

一夏「？」

篠「・・・・・な、何でもない！」

またそつ言つて一夏から視線をそむける篠だった

蒼也 side out

セシリ亞「なんですの……」

鈴「ねえ……」

その2組を物陰から見つめる姿があった

蒼也とシャルロッテ、一夏と篠

「・・・・・」

鈴とセシリアであった

2人の表情からは黒いものがうかがえる

鈴「あれって、『テート』……みね」

セシリア「そりですわね……」

鈴「そつかあ……あたしの見間違いでもなく、白日夢でもなく、
やつぱりそつか。よし殺す……！」

握りしめた鈴の右拳には既にヒジアーマーが展開しており、準戦闘モードになっていた

「ワラ」「ほひ、楽しそうだな」

鈴「……？」

声が聞こえ、後ろを向くとラウラが立っていた

「ラウラ、もう警戒するな。今の所、お前たちに危害を加えるつもりはない」

セシリア「し、信じられるものですかー？」

「ラウラ、もうか……」

「ラウラはもういい、エレベーターで降りていた一夏達を追いかけてやつとする

「鈴、「ああ、あっと待ちなさいよーー何処に行くつもつよーー」

「ラウラ、「決まってる、私も父娘だ」

セシリ亞「ま、待つて下さい……未知数の敵と戦うには、まず情報収集が先決ですわ……その上で、関係がどのようなのか見極めないと……」

鈴「うんうん！」

セシリ亞の言葉にうなづく鈴

「ウラ、なるほど……理あるな」

セシリ亞・鈴・ラウラ「…………」

そして、3人は決めた
彼らの尾行を開始すると

蒼也 side

蒼也「なあ、シャルロット」

シャルロット「ん、なにかな？」

ショッピングモールを歩いていた途中、気になつた事があつたので
問い合わせる

蒼也「びひして、畠に女だつてぱらしたんだ？ああ言つてたから、
まだ男子のフリをすると思つてたんだが・・・」

シャルロット「えっと、ね・・・・・蒼也こ、ちやんと女の子として・・・・・見てもらいたかったんだ／＼」

蒼也「そ、そつか・・・・・でも俺は、シャルロットの事はちやんと女として見てるだ?」

シャルロット「そ、そづ・・・・・／＼／＼

俺の言葉に頬を赤くするシャルロット

蒼也「あ、そうだ。もう皆シャルロットが女子だつて知ってる訳だし・・・・・何か別の呼び方を考えるか」

シャルロット「え、いいの?」

蒼也「ああ。うーん・・・・・俺とシャルロットの間だけの呼び名・

・・・・・シャルなんてどうだ？呼びやすいし、親しみやすいし

シャルロット「う、うん…！いいよ、す、ぐ、こ、い！…」

蒼也「そ、そ、う、か、…、」

シャルロットの喜びよひ少し押される蒼也

蒼也「…、…、あ」

ふと、目に入った物を見る蒼也

シャル「蒼也？」

蒼也「悪い、先に行つて水着選んでてくれ。俺もすぐに行く」

シャル「?分かつた」

そつ言つて、シャルはすぐそこだつた水着店に入つていつた

一 夏「ビーナス、蒼也?」

簾「いれは・・・・・・・・」

後ろか一夏と簾に声をかけられる

蒼也「ああ、ちよつと匂つてこいつと思つてな」

蒼也はそつ言つて店の中に入つていつた

蒼也 side out

第1-3話 愛称、それは関係進展のフラグ？（後書き）

次話はで2人つきりのあれ！！

皆さん、お楽しみに！！

ではでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0414r/>

IS（インフィニット・ストラatos）～空を愛する蒼剣～
2011年5月20日15時41分発行